

# コイレ・シリアの人、イアンブリコス 『普遍数学論（ピュタゴラス派集成第三論攷）』(I)

プロホドス [recto]

## 解題 イアンブリコスと『普遍数学論』

以下は、新。プラトン主義協会・翻訳プロジェクト、プロホドス [recto] として訳出した、コイレ・シリアの人がイアンブリコスの『普遍数学論』全体のほぼ半分である。本文を見ていただくまえに、著者イアンブリコスと、全著作および集成のなかでの『普遍数学論』の位置づけを簡単に記しておきたい。

エウナピオスによると、イアンブリコスの生地はコイレ・シリアのカルキスであり、生年は紀元後二四〇～五年前後と推定されている。「イアンブリコス」という名前は、「王である」という意味の、当時のセム系言語（シリア語もしくはアラム語ともいわれる）の ya-nliku にもとづき、その名に違わず王統の血を継ぐといわれている<sup>(1)</sup>。どのような経緯で哲学に携わるようになつたかわからないが、かれはまずペリパトス派のアナトリオスに、ついで新プラトン主義学者として知られるポルピュリオスに師事したと推定されている。だがこの師弟関係は円満なまま終わらず、のちにイアンブリコスはポルピュリオスの学説に批判的になつ

ていく。おそらくそれが原因となり、イアンブリコスはポルピュリオスのもとを離れて、シリアのアンティオキア郊外のアパメイア（もしくはダフネ）にみずからの学派を設立する。そして、これも不確定だが、三二〇年代前半に死んだと推定されている。

かれの著作のすべては残つておらず、一部のみ、もしくは断片となつてしまつたものも多い。すべてを紹介することはできないが、『普遍数学論』のように、一定の主題を展開した著作も、プラトンやアリストテレスの著作にたいする註釈も存在していた。その著作は、かれの人生や哲学の段階に応じて三期に分けられる。

- ・第一期 ポルピュリオスに師事する以前のもの。この時期には新。ピュタゴラス派に関連する作品が書かれたと推定される。
- ・第二期 ポルピュリオスに師事したのち、かれのもとを離れ、アパメイアに学堂を開いた時期のもの。『普遍数学論』を含めた「ピュタゴラス派集成」、およびプラトン、アリストテレスなどへの註釈書はこの時期に属すと考えられる。
- ・第三期 アパメイアでの学堂建設ののち、死までの時期のもの。いわゆる「カルデアの神託」の大きな影響が著作に見ら

れるという。

すでに記したとおり、『普遍数学論』は、イアンブリコス第二期のものと推測され、「ピュタゴラス派集成」として構想された一〇巻からなる作品群の第三論攷として著わされた。この集成を構成する作品のタイトルを示せば、以下のようになる。<sup>(2)</sup>

- ・第五論攷『自然学対象における算術論』。
- ・第六論攷『倫理学対象における算術論』。
- ・第七論攷『神学対象における算術論』。
- ・第八論攷『ピュタゴラス主義幾何学論』。
- ・第九論攷『ピュタゴラス主義音楽論』。
- (第一〇論攷『ピュタゴラス主義天文学論』)

・第一論攷『ピュタゴラス的な生について』。ピュタゴラスとその学派の生のあり方を示す。現存。

・第二論攷『哲学の勧め』。哲学的生、つまりピュタゴラス主義的な生の方向性を示す。現存。

以上二つの論攷がピュタゴラス主義にかなつた生のあるべきすがたを紹介するとすれば、以下はかかる主義が実践する学のあり方を示す。同時にそれは、純粹な数論から、対象への応用という経路をたどつてゐる。

・第三論攷『普遍数学論』。数学的学知の構造を示す。

・第四論攷『ニコマコスの算術入門』。一世紀の新ピュタゴラス主義の数学者、グラサのニコマコスの算術入門を紹介する。現存。

第五巻以降はすべて失われてしまつたが、第九論攷までの内容の一部が一世紀のプセッロスによる要約として伝えられている。とはいへここではタイトルのみにとどめたい。<sup>(3)</sup> 第一〇論攷はプセッロスの要約にはみえないが、第四論攷卷末で示された、以降の著述プログラムにおいて、「天文学（もしくは天球学）」への言及があり、これにもとづいて、その存在がつよく推測されている。

『普遍数学論』の目的とは、第一に、数学という学そのものの意義や、数論や幾何学など数学諸学相互の関係、数学対象の存在論的な立場をしめすことにある。だがそれのみならず、*κοινή*という語からもわかるように、哲学や自然学、さらにその対象にたいして数学が持つ共通性やその原因を、また学習者にたいする効用なども本書は論じてゐる。数学の目的をしめし、その意義を論じることは、数学を魂の浄化にもちいるピュタゴラス主義的な観点からも、また『国家』に代表されるように数学教育を重視するプラトン主義の伝統からも、哲学活動の第一歩として必要な教程であり、そのかぎりで本書は入門書的な性格をつよくもつてゐる。構成という観点からみると、本書は他の著作からの引用がおおく行われており、それゆえ学説史的な側面もすくなくあらず有している。したがつてそのかぎりでは、イアンブリコスは編集者であるといえるかもしれない。だがいざれにせよ、本書が三一四世紀のピュタゴラス－プラトン主義者の手による作品にはかわりはなく、資料のあつかいかたも含めて、イアンブリコスの思想をうかがうに際して、その重要性は搖るがないとおもわれる。

プロホドス [recto] では、各人が担当箇所の訳を作成し、堀江聰・新プラトン主義協会会長、樋笠勝士・新プラトン主義協会委員の指導のもと、検討会をひらいた。その結果を踏まえ、再度読みあわせをおこなつた。本翻訳は、それらを統括責任者・金澤修がひとつにまとめたものである。そのさい、訳語や書式の統一をはかつたが、必ずしも完全とはいえない。その責めは統括責任者にある。

担当者とその箇所は以下のとおり。金澤修は解題、第一章(9,4-11,15)および第二章(45,24-48,10)、第二章(48,11-50,27)を、西村洋平は第二章(11,16-12,17)、第三章(12,18-14,17)、第九章(41,15-42,7)、第一〇章(42,7-43,14)、第一一章(43,15-45,23)を、田中あやは第四章(14,18-18,23)を、波多野知子・佐藤真基子は第五章(18,25-20,21)、第六章(20,22-23,9)を、中西恭子は第六章(23,10-27,24)を、袴田玲は第六章(27,24-28,16)、第七章(28,17-32,7)、第八章(32,8-12)を、加藤喜市は第八章(32,13-36,23)を、袴田涉は第八章(36,23-40,6)、第九章(40,7-41,15)をそれぞれ担当した(初回担当順に紹介した)。また頻出する引用、とりわけプラトン『国家』については、高木西子がチェックをおこなつた。

本文内での「」は訳者による補いを、「」は訳者によつてなされたテクニカルな語の強調を、「」は本文中になされた引用を、「」は、訳文とともににあつては校訂者によつて本文に付されたものを示しており、アラビア数字とともにあつては底本での頁付行数表示をしめす。<sup>4)</sup>

## 第一輯 (9,4~)

この探求の課題は、数学対象に共通の理論を提示するにあらでる。つまりその理論とは全体としていかなるものであるのか、いかなる単一の原因を有しているか、さらにその理論を導出し、個別数学に先行するいかなる存在本性を有しているのか、また單一の原因のあとに続く、この共通理論の一一つの原理はなんらかのしかたであるのか、われわれはこれらを探求するつもりである。そしてさらにかかる一分割のあとに、数学対象に或る一定数の類があるかどうか、その計算を、なんらか学問的分割のたすけを借りてわれわれは試みたいと思う。やうにその際には個々の定理には未だ触れずに、なんらか共通の眺望のもとで全数学対象の共通種をわれわれは探求しようと思う。

さて上述の課題の各論に入つて、数学諸学科の個々の類種が本性的に関わつてゐる存在をわれわれは提示しよう。全体にたいするそれら「数学対象」の連関とはどのようであるか、またそれら相互の秩序はどうであるのか、それらの間の同族性とはどのようなものであり、またなにに由来するのか、いかなる諸原理にもとづいて「同族性をもつものとして」まとめあげられているのか、それじしんに先行する、いかなる諸原因へと遡及するのか、またどのようなしかたでひとはそれら「諸原因」へと到達することができるのか、なにゆえに数学研究は有用であり、どれほど多くの諸善へと導くのか、数学研究がそれじたいとしても、またその研究から派生する諸学問をとおしても選択されるべき理由とはなにか、せんにそれが哲学全体に思考を向け変え、諸存在と可知的

対象<sup>(12)</sup>に関わる知識全体に向け変えること、これらをわれわれは残さず論じよう。この書物において論究すべきものとしてこれほど問題が提示されているのだ。では上記のうち、最初の問題から取りあげて始めていくことにしよう。

(10,7~) 一般的に言つて、数学対象すべてにかんする公理を、以下のようにわれわれは定めておきたい。<sup>(13)</sup> 数学対象とは非物体的であり、それじしんで存立している。非分割的な存在と、物体に関する分割的なものとの中間にあつて、つまり形相とロゴスという部分の無いものと「分割可能な」部分を有するものとの間の位置を占めていて、一方「部分を有するもの」よりは純粹だが、他方「部分の無いもの」よりは多様である。一方では合成と分割を被るが、他方では合成され、分割されたものを不生にして永遠なるしかたで保持するものである。そして一方では可知的存在より劣つているが、自然事物よりは先である。美と秩序と精確さというてんでは可視的なものよりは優れてはいるが、可知的対象よりは遅れをとる。そして均斎と、「上の領域と下の領域との」中間的な一致とを同じしかたでもちい、非分割的な形相へと運び、越境させる力<sup>(16)</sup>を有しているが、それは本性的にそれらにたいして同族的な関係にあるからなのだ。そして一方では物体に近しくなつてしまつていてひとびとをそれらから引き離し、他方ではあたかも高みへと導くなんらかの梯子をもちいるがごとく、神的な存在へと向け変えるものであると言えよう。

したがつて、「数学的」学知とは以上のようなものなのだから、「われわれは」物体や生成から離れ、表象や感覚から純粹になり、自体的な非物体に慣れ親しみ、連続的に「数学の」規定原理にかかる修練することで、この学知に着手せねばならない。そして、存在についての学、清浄なロゴスや非質料的な形相への清浄な直知、そして可知的対象の完成された真理から、数学対象を画定することが適當である。というのも、これら「数学対象」における完全で判明な知を、ひとはそれら「存在についての学、可知的対象の直知や完成された真理」に依拠してえることができるからで

いうのも、原因と、原因によつて完成させられているものとの媒介は、それらすべての類から、数学対象という中間的本性のものへとまず下がつてくるのであり、その上で生成するものどもを存在へと結びつけ、かつそれらのあいだ相互の交わりを作り出すものであるからだ。

(11,8~) さて数学対象の公理とは以上のとおりであり、また以上のようななしかたですべてのものに延び拡がつてゐるのであるから、数学的認識<sup>(17)</sup>といふのは中間的な知識であり、合成といふてんで知性よりも過多なものであり、むしろなんらか推移的で、多なるものを同一の中に集合させる、なんらか逐次的な思考と展開的思考をもちいる知識であり、中間的で完全に限定されてはいないものの、しかし無限なるものを巡り限定を行おうとし、いまだ十分に認識が達成されていない領野に明晰さを付与しようと、諸形相や諸ロゴスをもちいる知識だと言えよう。

## 第二章 (11,16~)

したがつて、「数学的」学知とは以上のようなものなのだから、「われわれは」物体や生成から離れ、表象や感覚から純粹になり、自体的な非物体に慣れ親しみ、連続的に「数学の」規定原理にかかる修練することで、この学知に着手せねばならない。そして、存在についての学、清浄なロゴスや非質料的な形相への清浄な直知、そして可知的対象の完成された真理から、数学対象を画定することが適當である。というのも、これら「数学対象」における完全で判明な知を、ひとはそれら「存在についての学、可知的対象の直知や完成された真理」に依拠してえることができるからで

ある。<sup>(20)</sup> また、「数学対象は」諸存在の中間的類種すべてに、すなわち一定数に内包されたすべて、またなんらかの種差にもとづいて限定的に発出するすべてにおいておよぶ。そして、「数学対象の一」或るものは、はるか先まですみ、高みへと昇るが、或るものは、劣つた下位のものに近づく。また或るものは、それらの中間に位置し、その両端を結びつけるのである。数学対象の類や種を、こうしたすべての相にもとづいて区別しなければならない。さらに、自体的なものと対他的なものを区別しなければならない。また、量の差異という側面からも、そして「数学対象が延び拡がっている」中間的なロゴスと形相の分割にあわせて、数学対象を区別してとらえなければならない。また、「数学対象の一」諸本性が相互に秩序づけられた関係をもつたために、数学対象の或るもののはより先であり、或るもののはより後であると仮定しなければならない。また、ちようどアルキュタスも認識にかんする線の分割のなかで明らかにそうするように、ひとは中間的にして推移的であるかぎりの魂の認識能力にもとづいて、数学対象の差異をかぞえあげることができる。<sup>(21)</sup>

以上のようなことが、下絵の素描のようなものとして、数学対象をめぐる共通理論への最初の把握だとしよう。さて、われわれはこれから論について、すでにべられた問題をはじめから取りあげて、個別に論じてゆこう。

(13,9) だが或るものたちは、魂や魂の生命活動、諸能力のうちに上述の原理「限定と無限定」を仮定してしまうかぎりで、おそらく数学のそうした原理に動をあたえてしまうかもしれないが、「そうするのではなく」魂を存在の別の類にふくめ、数学の原理や数学的存在は不動なのだと把握するほうがまさつている。といふのも、数学対象の形相はつねにとどまり、われわれはそれらをおなじしかたの同一なものとして観るからである。<sup>(22)</sup> すると、限定の相はつねに無限定の相にたいして支配的であり、無限定の相をみずからのうちに包摂し限定するゆえに、これら「無限定と限定」の原理はなにか中間的である。それゆえに、「それらの原理は」無限定なものへとつねに発出する一方、限定を与えるものによつ

## 第二章 (12, 17~)

では一般に、あらゆる数学対象について、なにが数学的存在の原理なのか画定してみよう。というのも、あらゆる学知は固有の

て規定される。したがつて、一方、これら数学の原理は分割や結合、多さや大きさの原因をそれじしんから授けるゆえに、知性のうちに属するものとは異なるのだが、他方、不動であり、中間に配された媒介的で非物体的な「原理のばあい」、それじたいとしてまさに質料から離存しているゆえに、自然のロゴスや魂のロゴスとは切り離されるのだ。ところで「魂や自然の」原理は質料にも触れるのである。したがつて、こうしたことからひとは、数学の原理が他の原因とは異なるのだと納得できるだろう。だが、万物に延び拡がる数学の共通性とは、このように端的なしかたで理解された中間性をもとにして把握されるべきであるし、さらに非分割的で知性的な形相より劣つた本性ではあるが、物体をめぐりある。そして、ひとが「数学の」規定原理を把握するならば、その規定原理における数学の、こうした共通性にもとづいて観なければならない。また、無限定性も同様に、共通に万物に延び拡がつてゐると仮定すべきである。そして、もしなにかが数学形相の受容体として思惟されるならば、数学においてみられる多様な体系すべてに共通なものとして、これら「受容体」をのこしておくことが適當だ。というのも、そのようにしてひとは数学の共通性を把握しうるのだが、その共通性は多くの異なるもののうちに内在しているゆえに、ひとつ思惟によつてそれを包摂しようと考へるのはむずかしいのだ。いや、そのように知られることはほとんど不可能である。さて、「数学の」共通原理についても、これだけのことがともかくわれわれによつて規定されたとしよう。

#### 第四章（14,19~）

だが、もし数学対象それぞれにおける固有の諸原理にかんしても、「それらの原理が」なんであり、どのような性質のものなのか、そして、どのような自体的固有性をもち、どのような差異を相互間でもつのか、また、どのような差異をすべての存在の他のすべての原理にたいしてもつかをすつかり規定しなければならないとすれば、いまこそこれらの問題にかんしても詳細に論じるべきときである。ならば次のようにするのが最善だ。すなわち、それら「数学対象」のうちには或る序列があり、或るものはより先のものとして、序列のてんにではなく本性のてんでも先導するが<sup>24)</sup>（じつさい、それらはみずからとともに「他のものを」排除するが<sup>25)</sup>、「他のものによつて」ともに排除されることはなく、また、それらは「他のものを」含意するが、「他のものによつて」含意されることはない）、他のものはこれらの両方「序列と本性」において地位と単純さのてんで劣つてゐるのだから、まさにこれらの理由で、それら「数学対象」の本性にそくした序列にしたがうことつまり、まず初めに第一のものどもについて論じ、そうしてつぎに、他のものどもについて語ることがわれわれにもふさわしい。

(15,6~)さて、数学対象のうちでまず数をとりあげると、第一にして最上の原理は「一つあると仮定しなければならない」。一つは「一」である（まさにその「一」をまだ「存在」とは呼んではならない）。というのは、それは単純であり、一方それは諸存在の原理であるが、他方その原理は、それを原理とするものとまだ同じ性質のものではないからである）。そしてもう一方は逆に、「多く」と

いう原理であり、これはそれじしんで分割も提供することを可能にするものであるゆえに、可能なかぎり適切な比喩をさがすならば、なにか完全な液状ともいうべき可塑的な質料<sup>(28)</sup>に似ていると、われわれは主張できるであろう。これらから、すなわち、「一」と「多く」<sup>(29)</sup>という原理から、第一の類が完成される。数はこれら両者から構成されるが、それはなんらか説得的な必然性をともなつている。<sup>(29)</sup>そして、次々に生み出されていくそれぞれの数にかんして、一方、どの数にたいしても、どんな分割（一般的ないいかたをすれば、大きさ）でも提供するのが、こうした本性のもの「多く」という原理<sup>(1)</sup>であり、他方、数のそれぞれが或る性質のものであること、いや、規定されたもの、一なるものであることは、「多く」という本性に「刻印されることになる差異なき不可分な原理を、写しどつたのだというべきである。

また、それ「多く」という原理の方<sup>(1)</sup>は、大きさと分割の、さらに増加の自体的原因<sup>(2)</sup>ということが付随するからには、そうしたものは増加の自体的原因<sup>(3)</sup>といふことが付随するからには、そうしたものを、悪い、もしくは、醜いとするることはおそらく適切ではない。というのは、他のもののばあいにおいてさえ、われわれはそうした類を悪の側におくのがつねではないからであり、むしろ或る性質とともに編み込まれた「大」については、おそらく真実であろうが、それを壮大や慣用の原因であるとさえ言ふことがあるからなのだ。したがつて、その類を悪いと呼ぶことはとんでもないことである。

（16,2）なんといつても、もしひとが「一」というものを、それが自足的であり、数のうちのなか美しいものの原因であるゆえに称賛するとしたら、本性にそくしてそのようなものを受け入れ

るものが悪いものや醜いものだということは、どうして不合理ではないことがあるうか。というのは、いやしくもなにか称賛に値するものを受け入れることができるもの、それをもまた称賛に値するものと呼ぶべきだとすれば、悪いものと醜いものが非難されうるものとなることは、もはやけつしてないだろうから。さて、これ「多く」という原理<sup>(1)</sup>は、このよくなしかたで原理なのだと、われわれは考えたこととしよう。だが、「一」にかんしては、それが美や善の上位にあるゆえに、美とも善とも呼ばないことがふさわしい。というのも、「一」というものが原理たる地位を捨て、より遠くへ進みゆくときに、最初に美が現われ、諸要素がより大きな距離をもつときには、その次に善が現われるからである。<sup>(30)</sup>

（16,15）さてこうして、最初の受容体と大きさはあるいは、受容体をそもそもなんと呼ばなければならぬにせよ、一方、多さのてんでは当然ながら無規定のものではあるが、しかし他方、「一」の側から「形相を」受け取つて、形相のてんではどうにか規定されたものとして、数の形相を写しどつた。であるから、一方、もしひとが質料・受容体を、たつた一つのすべてのてんで無限定だと仮定するならば、「一」という相がそれ「質料・受容体」に生じたときに、「一」という相が一すべてのものを通して一樣である以上、「一」の下位にあるべき「類」が、「その上位の一」と同じものどもとしてこちらでもまた作り上げられるという不合理がおそらく生じることになる。その結果、すべての類がことごとく数になつてしまふ。というのは、われわれは適切な差異を結びつけることができないであろうから。少なくとも類似の諸要素に、しかも同じしかたで相互に結びついたそれらに由来するのに、一

体なにゆえ、つねに同じ類ではなく、最初は数なるものが、その後で線や面や図形というものが生まれるのだろうか。<sup>(31)</sup>

(17,1~) だが他方、もしひとが、すべての多さと大きさの第一原因は一つでありながら、自己のうちに多くの差異を提供するものだと仮定するとしたら、そしてまさにそれゆえに、「第一原因は」さまざまに異なる類をその本性全体にわたって産み出す定めになつてているのだとすれば、へ一〉は、すべてに渡つて似たものとして生じるにもかかわらず、質料の厚みゆえに、自己の本性を正確に顯すことはないのだ。それはどんな木材をもつてきても、かたちを「顯せるのとは異なる」。そのばあい、こういつたことが、木材に起ころのはおそらく不合理ではないであろうが、第一要素が、それほど多くの差異への分割をもつことに、ひとは我慢ならないであろう。だが、それはおそらくもつともなことだ。とりわけ、「第一要素が」すべての数学対象にすつかり行きわたるとするならば。<sup>(32)</sup> というのは、どんなばあいでも、最も単純なものこそ要素の名に値するのだから。

(17,13~) そこで残された道は、大きさになにか別の原因を仮定することにして、数においてへ一〉にそくして単位をおくるのと同様に、線においては点をおくことである。受容体の差異がそれ「受容体」由来の類になにか固有性を与えるのとは異なり、第一に、線と表面と立体にかんして空間的位置と間隔を生ぜしめ、つぎに、同様の手順で、空間をも生ぜしめるのだ。さらに、もしひとが、「大きさの」連続性も、数よりもっと汚れて、厚きを増すのも、それ「受容体」のせいだといつたら、おそらく間違つてはいないであろう。こうして、ここまでで、第二の類が完成されたことに

なるのだ。というのは、同じ類の中に私は線と立体と表面をおくからである。したがつて、数の質料が第一のものであり、線と面と立体図形の質料が第二のものだ。また、そうした類の他の数学対象にかんしても同様に、それはどれほどの数であり、どのようなものであると理性<sup>(33)</sup>が見出すにせよ、固有の受容体を前もつて措定しなければならないのである。

(18,1~) さて、これがわれわれにとつて事実だとしよう。だが、それから数が構成されている諸要素は、まだ美しいものでも善いものでもない。しかし、へ一〉と、へ多〉の原因である質料との結合から、一方で数が成立し、他方これらの中のものにおいて初めて、へ存在〉とへ美〉が現われ、つづいて線という諸要素から幾何学対象が現われるのだ。そして同様にその対象において、へ存在〉とへ美〉が現われるが、それらのうちには醜いものも悪いものもなない。だが最後に、末端の要素から結合合成された第四と第五のものどもにおいて悪徳が生じるのだが、それは先導的にではなく「先導的な原因をもつわけではなく」、なんらかのものが本性にくしたるものから堕落し、それを支配しないことから生じるのだ。

(18,14~) こうして以上のことから、数学の原理が他の諸々の原理にたいしていかなる差異をもつてゐるかが明らかである。というのは、「数学の原理は」一方、最終の諸原理よりも優れているのであり、その理由は、かの「最終の」諸原理はなんらか物體的だけれども、これら「数学の原理」は非物體的だからである、他方、生命において觀られる諸原理よりも優れている。というのも、後者は動の面で特徴づけられるけれども、前者は不動だからである。さらに他方、直知的諸原理よりも優れている。というのも、後

者は分割できないものとして先在するけれども、前者は結合と分割の原理を提供するからである。このようにわれわれは、数学の原理に共通の論も、「数学の原理」それぞれに固有の論も、規定したとしよう。くわえて、「数学の原理が」いかなるてんで他の諸原理と異なつてゐるのか、上記、区別されたとしよう。

## 第五章 (18, 24~)

つぎに、数学理論の前提として指定されているもの、いわば共通して数学全体に行き亘つてゐるものとは、普遍的な定理であつて、一方では数に、他方では大きさに適合することが可能であり、さらにまた音階<sup>(35)</sup>や天体の法則や他のあらゆるものにも適合することが可能な共通定理の一切である。

他方、そうしたものは、数比に属する定理であり<sup>(36)</sup>、共通の結合と分離に関する定理であつて、どのようなあり方のものであろうと、もしくはどのようなものであろうと、「等と不等」に関しても、最もかぎりのものであり、また倍数や約数を考察するかぎりのものであつて、「超過と不足」を、もしくは「限定と無限定」を共通の眼差しのもとで、もしくは「自体的にあるものと対他的にあるもの」を、もしくは「端的な量と」——これはこれこれ様の「特定の一定の形相を受け入れないものだが——相対的な量」を、もしくは学の対象となるかぎりで数学的形相のうちにある「秩序と美」を——これはこれこれ様の「特定の」美をさらに規定するものではないのだが（というのも、既にそのようなものは部分的な知に触れているから）を——観るかぎりのものだ。また他方で、数学という確かに揺るぎないものが考察しているかぎりのもの

<sup>(39)</sup> を、それは或るときに別のものへと変化しないもの、その固有のありかたから逸脱しないもの、いまはこのように考えられている対象が次には違つたふうに考えられないものだが、「普遍的な定理は」これらを数学という学術のもとに共通する基礎的指定としたうえで、推理計算を有しているのだ。

(19, 19~) しかしながら、こうした共通定理は、後発のものとして考えてはならず、個別的なものより先なるものとして考えるべきである。また、部分的なもののうちに、部分的なものとともに本質をもつものとして考えてもならず、部分的なものよりも先でより始原的な本質をもつものとして考えるべきである。たしかに、その本質は、部分的なものに遍く行き渡つてゐるのではなく、それぞれの学に固有の数学対象より前に置かれている。まさにそれ故に、その「数学的知識の前提にある」共通定理もまた、部分的なものに共通でそれらに先行し、個別的な知より完全で、すべてのものを共通に俯瞰し、あらゆる数学定理を一から組成し一へと秩序づけることができ、それらが互いに同族的で似てゐることを注視し、またそれらのもののうち似ておらず異なるものを比較し、それらのうち第一のもの「基本原理」であるかぎりの類と種を同じものへ総合し、<sup>(40)</sup>「共通する同意事項」と「最初の仮設」、「定義と定立」、「分割と総合」、「結合と分離」、「超過と不足」を区別し、要するに、どのような類であれ数学的に存在するものの類にもとづく対比を見る。おのの個別に区別することなく、個別のもののうちで可能なものと不可能なもの、必然的なものと非必然的なもの、真なるものと偽なるものを区別し、それらのものにおける相違を、それらが相違するかぎり、またどのような相違で

あらうとも、正確に調査するのだ。

(20,19-) 数学的知識の前提として指定された共通してあるものについても、数学的知識にそくした理論に共通する方法についても、いまのところ、これだけのことがわれわれによつて定義されたこととしよう。

## 第六章 (20,22-)

だが、そうした数学の対象全般については、以下のように考えられなければならない。すなわち、もしそうしたもののおのおのを正しく把握するなら、それを適切に受け入れるものにとつては大きな利益が生じる。しかし、そうでないなら、そのつど神を呼び寄せるにしくはないのだ、と。さてその方法とは以下のとおりである。というのも、これだけのことは示さなければならないからだ。すべての図形、数の体系、すべての音階の構成、星々の周行から生じる類比が、へあらゆるものにたいして「なるもの」といふことを、適切に学ぶものに明白にしなければならない<sup>(42)</sup>。だがそれらは、われわれが言つてゐることを正しく注視して学ぶばかりで、明らかになるだろう。というのも、思考を働かせるものにとっては、そうしたすべてを本来繋ぎ止める一つの紐帯が明白になるからだ。他方なんらか別のしかたで着手するならば、實際われわれも口にするように、神の計らいを招来しなければならない。というのも、少なくともそくした数学的な認識がなければ、なんらか幸福な秩序は決して国家に生じないからである。われわれは、以上の手順、以上の生の糧となるもの、以上の数学対象に、それが困難なものであらうと容易なものであらうと、上記のよう

なしかたで進めて行かなければならないのだ。だが、こうしたすべてのものについて適切に語られる幸福をもたらす啓示が明らかになつたからには、神々を疎かにすることは正当なことではない。他方、こうしたこと全体をこのように把握したものを、最も真実に最も賢いものだと私は言う。というのも、あらゆるものの中でも最も美しく最も神的な自然本性を、神がそれを洞察するよう人に許可されたかぎり、いましがた語られた事柄を抜きにしては、ひとは洞察して氣楽に理解することを誇ることは決してないからである。<sup>(43)</sup>

(21,18-) こうしたことにくわえて、一つにそくしてある手法、形相ごとにある手法を、数学対象のおのおのの認識のうちに引き入れなければならない、あらゆるものの中で最も神的なロゴスが可視的なものとして配置した宇宙の秩序全体をわれわれが見つけ出すまでは。幸福なものはその可視的世界にまず驚嘆し、それから、本性上死すべき人間にとつて可能なかぎりの一切を学ぶことを愛した。真実本当に秘儀を受けられて、「なるもの」として一なる思慮の分け前に与り、残りの人生を、視覚によつて捉えられる極めて美しい美を観るものとなつて完遂するのだと考へ、最終的に徳によつて相応しい場所へと行つて、これほどまでに非常に幸福に人生を全うするのだと考へて。

(22,5-) 他方で、教養課程の中でバラバラになつてしまつた数学対象を、諸学相互の同族関係と存在するものの本性を俯瞰する視点の下に総合しなければならない。というのも、そうした学習だけが、それが生じるものならそこにおいて確固としたものになるだろうからだ。だが、眼や他の諸感覚を支配することができる

ものは、自由な身となつて真実をともなつて存在するものそれじたいに向かつて行かなければならぬ。しかし、最善の自然本性に適合している他のものを身に付けているものたちもまた数学において確固として鋭敏なものとならなければならぬ。ちようど（プラトンも言つているように）、もし四肢健全で心が健全なものそれをほどの学やそれほどの訓練へと導いて配慮して教育するならば、正義の裁きはみずからわれわれを非難しないだらうし、われわれは国家や国政を救うだらう。しかしそれとは異なつたものをそうしたところに連れて行くならば、われわれはまったく反対のことをなしてしまい、学を好むことにたいして、より多くの嘲笑をさらに浴びることとなるだらう。<sup>(45)</sup>

(22, 19-) また他方、真実全体をそれがあるとおりに語らなければならぬのならば、おののおのの魂の或る器官は、こうした諸学においてすつかり清められ再び燃え立たせられる。それは、いつも従事しているさまざまなることがらによつて破壊され、盲目にされているのだが、これを健全に保つことは、数多の眼（視覚）を保全するよりも良いのである。<sup>(46)</sup> というのも、こうした器官によつてのみ真実は見られるからである。したがつて、こうした考え方ともにするひとびとにとつては、目前の事柄は途方もないほど非常に良く語られていると思われる。しかし、こうしたことまつたく感知したことのないひとびとは、当然のことながら、われわれはなにも意味のあることを語つていないと考へるだらう。といふのもかれらは、それらのことから生じる、語るに値するほどの別の利益を見ないからなのだ。<sup>(47)</sup> しかしじつさいは、どうやらそれは陶片が面を変えて回ることではなく、なんらか夜のような昼か

ら真実の昼へと向かう魂の転向であろう。真実の昼は存在するものへの上昇であり、それこそわれわれは真の学びへの愛だと主張するであろう。だから諸学の中でどの学問がそうした力をもつてゐるのかということを、そしてどの学問が生成するものから存在するものへと魂を引っ張つていくものであるのかということをよく考へてみなければならない。<sup>(48)</sup>

(23, 10-) そこで私は主張するのだが、感覚で捉えられるものには、感覚によつて充分に判別されているので、吟味をくわえるために知性活動に助力を頼まないものと、感覚が十全なことを行わないもので、知性活動が全面的にその吟味を命じられるもの「の二つ」がある。<sup>(51)</sup> そして知性に助力を頼まないものとは、その感覚がそれとは反対の感覚へと同時に到らないものであり、またそちらへ到るもののが、知性の助力を頼むものだと私は定める。といふのもそのばあい、感覚は、それ「感覚対象」を、これであるとも、その反対のものであるとも、近くから感覚するにせよ、遠くからにせよ、まったく明らかにしないからだ。<sup>(52)</sup> 以下のようにすれば、私の言わんとするこことをより明快にわれわれは理解できるだらう。ここに二本の指があるとしよう。小指と、一番目の指と、真ん中の指だ。<sup>(53)</sup> ではいま、私が言うのは、それらが近くから見られているところだと思つてくれ。さてそれら「指」についてとりわけ次のこと考察してくれ。それらはそれぞれが同じように指として現れていて、少なくとも指であるという点においては少しも違ひはない。指が真ん中に見られようと、端であろうと、白かろうと黒かろうと、太かろうと細かろうと、そのようななたぐいのどのような違いがあらうとも、だ。つまりすべてこのようなばあいな

らば、多くのひとびとの魂は、「みずから」の知性に、指とはそもそもなんなかと問い合わせることはない。というのも視覚じたいは指をそれとは正反対のものとして同時に示すことなど決してなかつたからだ。だからもちろんそのような場合は知性に助力を仰ぐことはないだろう。

(24,7) ではどうだろうか。指の大きさと小ささを視覚ははたして充分に見るのだろうか。視覚にとって「指の大小は」それが真ん中にあるのと端にあるのとでは、なんの差異もないのだろうか。同様に太さと細さや硬さ「と柔らかさ」を触覚は充分に感じ取るだろうか。さらにその他の諸感覺もはたしてこの種のことを見て不足なく明らかにしてくれるのだろうか。いやむしろ感覺はそれぞれ次のようなこと「のみを」をするのだ。最初に硬いものの上に置かれた感覺は、必ずや軟らかいものの上に置かれることで、同じものが硬くもあり軟らかくも感じられると魂に報告することになるのではなかろうか。こうした状況において魂は必然的に困惑に陥る、感覺じたいが硬いと示している同じものを、軟らかいとも告げるとはいつたいどうしたことなのか、と。あるいは、軽いという感覺や重いという感覺が、軽いものを重いと、重いものを軽いと告げるとき、重さや軽さとはいつたまにを意味するのか、と。こういつた魂を困惑させる伝達はさらなる検討が必要とされるのである。だとするとこののような状況では当然、魂はまず計算能力と知性を呼び出して、報告されているもののそれが一つのものか、あるいは、二つのものかを検討しようとする。そこで「報告されているものが」もし二つとして現れるのなら、それらが別々のものであつてそれぞれが一つであることが明

らかになるだろう。<sup>(63)</sup> それぞれが一つで、両者あわせて二つならば、それを二つとして区別されたものと認識するだろう。というのもその二つが区別されずに認識されていたら、一つのものと認められてはいたはずだからだ。<sup>(64)</sup> ところで私たちが主張するように、確かに視覚も大と小とを見てはいたが、それは区別されたものではなく、なんらか融合したものであつた。だがこの事態を明らかにするためには、知性がふたたび大と小とを直視しなければならなくなつた、「ただし」両者「大と小」が融合したものをではなく、区別されたものとして、視覚<sup>(65)</sup>とは反対の方法で。したがつてわれわれはこの段階ではじめて次のような問いを立てることになるのではないだろうか。そもそも大とは、また小とはなんなのか、と。そして私たちはこのようにして知性によつて知られるものと見られるものとを区別した。

(25,9) このようなことをちよどさきにも言おうとして、思考を助力に仰ぐものとそうでないものとがある、じしんとは反対のものと同時に感覺のなかへ到るものと「思考に」助力を頼むものとして、そうでないものは知性を喚起するものではないとして「それぞれ」規定したのだ。<sup>(66)</sup> ではどうだろうか。数と一とさまざまな数学対象はどうちらに属すると思われるか、このことは前に述べたことから容易に推し量れる。もし一やなんらかの数学対象が充分に見られるか、あるいは、他の感覺によつても把握される場合であれば、指の例で述べたように、それは実在へと惹きよせるものではないだろう。だがもし、「それが見られるときには」つねにそれと反対のなにかが同時に見られ、一つのものとして現れるのとまったく劣らずに、また反対のものとしても現れるなら

ば、それらの判定者が必要になるだろうし、またそのような状況において魂は混乱<sup>(6)</sup>に陥ること<sup>(7)</sup>を余儀なくされ、みずからのかで思考をめぐらせて問い合わせにはいられなくなり、そして問うだろう、いつたい一とは何であるかと。このように一について学ぶことは魂を実在についての観想の方へ導いて向け変えるだろう。<sup>(8)</sup>

(25, 25-) たしかに、それについての視覚は少なからずこのようなことを備えている。というのも私たちは同じものを一であると見ながら、同時にまた無限に多いとも見るのだから。<sup>(9)</sup>したがつて一がそうであるなら、すべての数はそれと同じ状態を備えていることになる。<sup>(10)</sup>しかるにまさに計算術と数論はみな数にかかることがある。<sup>(11)</sup>このようなことがらが真理へ導くものであることは明らかだ。<sup>(12)</sup>並外れて、どうやらそれはわれわれの求めている学科の一つであるようだ。<sup>(13)</sup>また同様にこの学術には、生成界から抜け出して実在にふれるがゆえに、感覚から離れ知性を喚起するがゆえに、また実在するものの本性の観照へと招くがゆえに、魂じしんが生成界から真理と実在へ向きを変えることをもつとも容易に準備するがゆえに、さまざま有用性が認められる。

(26, 10-) だから知るために数学的諸学を営むことが必要なのだ。<sup>(14)</sup>じつにこうして「数学を学ぶことによつて」魂はどこか上方へと強く引きあげられて、「数学は魂に」存在そのものについて問答するよう強くいるので、もしも誰かが存在を、目に見え手で触れられる物体でもつて覆い隠して議論しようとしても、それらを「この諸学科は」けつして受け入れないのだ。<sup>(15)</sup>というのも思考されることのみが許され、ほかのしかたではけつして扱われえ

ないものについてかれらは語つてゐるからだ。<sup>(16)</sup>だからこの諸学科はまさに必要欠くべからざるものと思われる。というのも、それ「諸学」が知性そのものを用いて魂に真理それじたいの方へ向かつてゆくよう強いることが明らかだからのだ。<sup>(17)</sup>確かにこの学問は、それを学びかつ修練するものをより鋭いものにするが、またかれらにより多くの苦労を課するものもある。

(26, 22-) 考察しなければならないのは、この学問が、あの目的、つまり善のイデアを見るなどを容易にするという目的にたいし、なにか益するものがあるかどうかということだ。私たちが主張するのは、魂がなんとしてでもそれを見るべき、もつとも祝福された存在がある、あの場所へ向け変えることを魂に強いるものはみな、その目的にたいしてなんらかの寄与を行つてゐるということだ。<sup>(18)</sup>だからもしも実在の観想をうながすならば目的に合致し、生成を見るよううながすならばそうではないのだ。<sup>(19)</sup>また、知識を目的とする各種の営みを——すなわち数学的諸学がそれにあたる——敬うべきであろう。それはつねにあるものに関する知の営みであつて、或るときに生成し消滅するものに関する知の営みではない。<sup>(20)</sup>したがつてこの諸学は魂を真理に向かつて引き付けるとともに、哲学者にふさわしい思考のありかたを鍛え上げ、いまのところ不當にも下方に向けているものを上方へと向けさせるものだといえよう。<sup>(21)</sup>じつさいそれら「数学的諸学」によつてのみ真理は見られるのだ。まさにこれら「数学的諸学」は、事物がいかにあるかがはつきりと開示されるために、継続的に集中して追求されなければならないのだ。<sup>(22)</sup>じつにとりわけそれ「数学諸学科」は、格段の魅力を備えている。魂に上方を見させるのである。<sup>(23)</sup>

(27,10~) ところでこれらの数学対象とは、不可視であるかぎりの実在にかかるものであつて、論理と思考とによつて把握されるが、視覚によつて把握されるものではない。たしかに天体の現象は「幾何学の」モデルとしても用いるべきだが、しかし、等しいものや二倍のもの、あるいは、そのほかもろもろの比例関係などの真のありかたを、モデルのなかに捉えようというつもりで、まじめにそれを考察すべきではないのだ。じつさい、それら「天体」が物体を備え、可視的であるにもかかわらず、つねに同じしかたであり、決して変化しないとみなすのであれば、そしてあらゆる手段を尽くしてそれらにかんする真理をつかもうと努力するのならば、まつたく奇妙なことだ。<sup>101</sup> すべてのてんにわたつて注意すべきなのは、私たちが教育しようとしているひとたちが、それらのうちのなにか不完全なことがらを、つまり、すべての学問が向かうべき地点につねに到達しえないようななことがらを学ぼうなどとしないように、ということだ。<sup>102</sup> というのも、このようなしかたでこそ、それ「数学的諸学」は美にして善なるものの探求に役立つのだが、そうでないならば、その追求は無用だからだ。<sup>103</sup>

(27,24~) ところで、あらゆる数学の探求が、たがいの共通性と同族性「を見て取ること」に至り、それらがどういう点でたがいにたいして固有なのかを勘考するなら、われわれが目指しているものにたずさわることは無駄な骨折りではない。だが、そうしないならば骨折り損になることだろう。<sup>104</sup> というのも、縛めからの解放、影から模像と光の方への向き直り、地下のものと感覚的なものから太陽と善への上昇、そしてその地では、一方でまだ動物や植物や太陽の光を——すなわち清浄な種や類を——直視するこ

とはできないこと、他方で水に映つた神的な影像と諸存在の影は——とはいえ、太陽と比べれば別だけれども太陽に似た光によつて映し出された模像の影といふわけではなく——観ることができること。このような力を、われわれがこれまで述べてきた諸学にたずさわることはすべて有しており、魂のうちなる最も善い部分を導いて、諸存在のうちなる最も優れたものを観ることへと上昇させる働きをもつ。ちょうど、肉体のうちなる最も明確な部分「目」のばあい、目に見える物体的な場所のうちなる最も輝かしいもの「太陽」を観ることへと導かれるよう<sup>105</sup> に。数学対象の最善の効用はこののようなものであり、それらの最も主たる目的はこのようなものだ。

## 第七章 (28, 17~)

数学的知識のそれぞれについても、それぞれに前提されている固有の認識対象を規定していかねばならないので、われわれは分割することから始めて、それらが従事する数学対象の種を区分しよう。なぜなら、そうすることでわれわれは数学におけるへーとへ多ーを、そしてその「数学の」起源はどこにあるのか、そしてどのような種差に応じて分けられているのかを最も容易に学ぶことができるであろうから。それではここから始めよう。

(28,24~) あらゆる存在——すなわち宇宙全体の構成だが——には、連続的なものと離散的なものの二つが考えられる。つまり、一方では並置と集積に応じて離散的なものがあり、他方では統一性と結合性に応じて連続的なものがある。片や連続して統一されたものは「大きさ」とふさわしく呼ばれ、片や並べ置かれ離散し

たものは「多く」とふさわしく呼ばれる。宇宙は、一方でこの「大きさ」<sup>12</sup>という本性に従うならば、一であると考えられ、球状の立体で、一体となつた自己として延長しており、かつ、統合されていふと言ふことができる。他方、今度はこの「多く」という観点や概念にしたがうならば、万物の序列であり秩序であり調和だと考えられ、それは「多く」の要素から、天体や星々の種族と動植物の対立と類似から成り立つをえている。ところで、一方、統一的なものの分割は、その全体から無限に進むが、増加は有限である。他方、多は逆の関係が成り立つのであって、その増加は無限に進むのだが、反対に分割は有限である。それゆえ、本性上も思考上も、そのどちらも無限なので、そのためには「数学的」<sup>13</sup>諸学によつては限定されない面がある。「万物が無限ならば、知られうるであろうものすら端から存在しえないだろうから」<sup>109</sup>とピロラオスも述べているとおりである。

(29,22~)しかし、かくも神的摂理によつて精巧に造られた諸存在のうちに数学的本性が觀取されることは必然なので、数学的諸学はおののから区分けされて、「己が包括する対象を境界づけている。すでによく知られているように、ひとびとは多の側面から量と名づけ、他方同様に、大きさからは広がりと呼んだのである。そして、それら双方の類は、それぞれの知のかたちによつて個々の数学の下にひとびとが割り振つたのである。すなわち、算術の下に量を、幾何学の下に広がりを帰属させた。しかしこらのものは單一種ではなかつたので、それらのおののがいつそ部分的な下位区分を許容したのだ。(といふのも、量のうちの或る数は、他の数にたいする関係からなんらか自由であり、じし

んにそくしてある数、例えて言うならば偶数、奇数、完全数<sup>11</sup>、不足数<sup>12</sup>、などである。また或る数は、他の数にたいしてなんらかの状態にある数、なにかにたいして本来的に量と言われる数「他の数」との関係で特別な言い方をされる数<sup>13</sup>、たとえば等<sup>14</sup>であるとか不等<sup>15</sup>であるとか、倍<sup>16</sup>数<sup>17</sup>であるとか、エピモリオス数比<sup>18</sup>であるとか、エピメレス数比<sup>19</sup>であるとか、それに関連する数比である。今度は広がりについて、或るものは現実に静止しているし、また静止していると思考され、或るものはじつさいに動かされ運ばれ、或るものは動き移動するものである)。これゆえ、すでに導入された二つの個別数学に別の二つの個別数学が参与するのがもつともなのであり、それら二つの個別数学がおののの学の対象の考察にたずさわるのは当然である。事実、片や——とりわけじしんにそくした量についての考察を担う——算術には、関係的分量を扱う専門的技術である音楽が加わつたのであり(なぜなら音楽の調和「和声」と協和にまつわることは、音のたがいにたいする関係と比、また、超過と不足の量を細かく規定すること以外のなにも明らかにはしないのだから)、片や——静止し固定した広がりの精査にたずさわる——幾何学には、天球学が動く広がり——これはあきらかに最も完全で規則的で均質<sup>17</sup>均一<sup>18</sup>な動きをするもののことだが——の裁定者として加わつた。

(31,4~)それゆえに、基体において兄弟であるものにそれらもまたかかわるのだから、これらの個別数学もまた兄弟として考えることは理に適つてゐる。アルキュタスの次の言葉が教養なきものとして響かないようだ。「じつさい、これらの数学は兄弟であると思われる」。これらのもの「数学」は、鎖の環のように相互に

固着し、一連なりになつてゐると考えるこども理に適つてゐる。<sup>(119)</sup>最も神的なプラトンが言うように、<sup>(120)</sup>数学の同族関係が一なるものだということを、適切に学ぶものに明白にすることはふさわしい。さて、これらのものすべてをかれ「プラトン」が定めたように習得したもの、まさにこのものをかれは最も真実の意味で最も知恵あるものと呼び、戯れながらもこれを断言する。そして熱心に知を愛求するものたちにこれらの数学が——難しかろうと、易しかろうと——追い求められ、なによりもまず選択されるべきだとかれは推奨する。じつにこれはもつともな主張である、連續的なものと離散的なものの把握が、これらのもののみを通じて生ずるからには。宇宙と宇宙のうちにあるすべてのものが連續的なものと離散的なものから成り立つてゐるのだから。

(32, 1~) そこで、これらのものの精確な把握は知恵であり、知恵への希求は愛知であり、愛知はあらゆる技術と知識のうちで唯一これのみが、その本性にそくした人間固有の目的をもたらし、他の生物を除く人間のみに属し、かつ、本性にそくして熱心に求められる幸福へと導くのである。それが人間に最もふさわしい目的であるがゆえに。

## 第八章 (32,8~)

さてではさらなることを、つまりすべての数学の徵標について語らねばならない。それはいかなる種類のものがあり、それはみずからのうちに、その働きについてのいかなる差異をもつのかを。それでは、上位のものを再びとりあげて、これ「数学の徵標」についての全体像を、分割を用いて教授しよう。

(32,13~) さて、すべての可知的対象は、固有の意味で可知的対象、すなわち学の対象と呼ばれるものと、思考の対象との二つに区別される。そして、「固有の意味での」可知的対象が第一のものであり、思考の対象というものは、可知的対象から派生して「それ」とは異なるのだが、感覚対象のうち、或るものは固有の意味での感覚対象であり（これらは思いなしの対象でもある）、また或るものは似像的対象である。たとえば、石や木材や四元素のような個別の物体が思いなしの対象、すなわち固有の意味での感覚対象であり、これらはまた感覚対象において第一のものである。これらあとに、力弱く「これらに」似ていなさいさまざまな対象があり、第一の感覚対象につきしたがつてゐる。こちら「似像的対象」は影なのだ。というのもじつさい、影は物体に付随するのであり、もしなにか他の基体となる物体を有するのでなければ、影は現れないからである。かくして、影や水・鏡のなかに「現れる」ものは映像であり、「水や鏡などの」他のもののなかに自体的にではなく存するので、他のものがなければ現れず、他の物体へと帰属しており、他の物体が取り去られると現れない。ゆえに、これらは感覚されるので、類においては感覚対象だが、現実に存するものというよりむしろ似像的対象であつて、確信の対象なのだ。「似像的対象・確信の対象は」論証されえないものに、すなわち「これらの対象を」もち出すひとびとの確信によつて、「論証とは」他のしかたで受容されるものにもとづく確信にそくしてゐる語られる。というのもじつさい、影のたぐいは、じしんにもとづいてではなく、影がそれらへと帰属しており、そのなかで憩う

ことで現れている物体にもとづいて把握されるからである。そのため、このような確信は不安定さを有している。というのもじつさい、影のたぐいは、もし鏡や水や地面から退くなら、まったく存在できないでからである。したがつて、もちろんの物体もまた思ひなしの対象であり、その存在は思ひなされることのなかにあるが、影の方はそれじしんから安定を有しておらず、他のものに支えられていることによつて、よりいつそう劣つてゐるのである。

(33, 16-)さて、思考の対象は、それも似像的対象に似ていて、似像的対象が「固有の意味での」感覚対象、すなわち思ひなしの対象にたいして有している類比関係を、学の対象、すなわち「固有の意味での」可知的対象にたいして有している。というのも、知性は、真実在であるもろもろのイデアを、あたかも触れるかのようにして有するが、思考の対象の方は（これがまさに幾何学対象のことだが）、思考によつて見られるのであり、思考はもはや真実在にまつすぐ、いわば直観的には近づかずに、むしろ真実在への接近は理性を通じて生じるのであり、またいわばイデアの似像、すなわち可知的映像へと降下したイデアから生じるからなのだ。似像的対象、すなわち影のなかに「現れる」ものが、「固有の意味での」感覚対象と比べて劣つてゐるのは、かのもの「固有の意味での」感覚対象は自体的にまつすぐ感覚へと帰属するが、これら「似像的対象・影のなかに映るもの」は他のもののなかで、他のもののうえで、他のもののゆえに観られるということによるのである。<sup>[26]</sup>なんといつても影は、自体的にではなく、自体的に感覚される地面のなかに、あるいは、まさにそれが自体的に感覚対象である鏡や水のなかに「現れる」のだから。

(34, 7-) ゆえに、そのようなしかたで数学対象もまた、あたかももらもろのイデアのなかで現れ、イデアのうえに支えを有しているように見える。というのも、数学対象は、感覚対象からの抽象によつて考案されるべきではなくて、イデアから下つてゐる以上は、大きさをくわえて受け取ることと延長において現れるこどによつて、イデアから映像的性格を有していると考案されるべきだからである。じつさい、感覚対象の映像において力なく自体的に支えのないまさにそのもの、それは、可知的対象においては嵩と延長とをもつものなのだ。しかし、このものもまた嵩なく部分なきものへと向かうのだから、影が感覚対象の抵抗のなかで憩うように、イデアの無部分性のなかで憩うように見える。

(34, 18-) ところで、思考の対象が「固有の意味での」可知的対象から分離してゐるよう、思考もまた知性から分離されてゐる。まさにそのため、ブロティノスもまた『知性と思考について』で、それらを互いに分離して、次のように述べてゐる。「だが、思考は知性よりも大なるものであり、思考されるものもまた知られるものよりも大なるものである。というのも、知性は単純なるもの、非合成なるもの、第一の直知するものにして直知されるものであり（ところで、形相はこのようなものである。というのも、形相は部分をもたず、合成されておらず、他のもののうちで第一のものであるから）、他方、思考は複合的、かつ部分をもつもの、第二の直知するものであり（というのも、思考は学知と理性をくわえて受け取つたのだから）、また、（思考に）対応して思考の対象にかんしても、これらは学の対象、論証の対象であり、知性によつて理性を通じて解される普遍的なものなのだから」。

(35,6~)さて、以上<sup>(130)</sup>の論述においてプロティノスは、思考と思考されるものを知性と可知的対象より大なるものと語つておる、「それは」力においてではなく、多さにおいてなのだが(力と多さは互いに反対の状態である)、思考と思考されるものが知性と可知的対象から区別されるのは、(一)こうした点「多さ」においてだけではなく、(二)一方が単純かつ非合成的であり、他方が多重形相かつ合成的であることによつて、また(三)一方が第一に直知し直知<sup>(131)</sup>されるのであり、他方が第一に、かつかのもの「知性と可知的対象」からそれらの「直知の」活動を受け取るものであるため、また(四)一方が形相のなかに存しており、他方が理性において複合的な活動を行なうため、また(五)一方が部分をもたず、他方が部分をもつため、また(六)一方が論証的推論よりも優れており、他方がもろもろの存在者について、なんらかを推論するため、また(七)一方が存在そのものであり、他方が普遍的なもののなかに個々のものを包含して、かつ同時に明示するため、また(八)一方が非質料的で純粹な活動を行使して、他方が混合された直知を有する(というのも、知性によつて理性を通じて、あるいは、理性を伴つた知性によつて、固有の認識対象を解するのだから)ために、区別されるのだ。それゆえに、以上から、思考の対象が「固有の意味での」可知的対象と異なり、思考が知性と異なるように、判別される事柄およびそれらの判別基準が「それぞれ」互いに区別されるといふことが帰結する。

(35,26)アルキユタスはさらに明瞭に、『知性と感覚について』で、諸存在の判別基準を区別しており、また、数学対象にもつとも固有な判別基準を提案しているが、「それは」以下のことを

つうじてである。というのも、「われわれじしんのうちには」、アルキユタスは主張する、「認識にかんして、知性、学知、思いなし、感覚の四つが魂にそくしてあり、それらのうちで知性と感覚の二つはロゴスの始原であり、学知と思ひなしの二つはロゴスの終極である。また、似たものはつねに似たものを識別するものである。ゆえに、われわれのうちなる知性が可知的対象を識別するものであり、学知が学の対象を、思ひなしが思ひなしの対象を、感覚が感覚対象を識別するものであることは明らかだ。まさにそれゆえに、思考は感覚対象から思ひなしの対象へ、思ひなしの対象から学の対象へ、そして学の対象から可知的対象へと移行しなければならない。そして、これらが協和状態になつたばあい、それらをつうじて観られるものが真実なのだ。

する。そして、かれらはこれらの構成されたものを既知のものとするのだが、「それらについて」自分じしんにたいしても、他のひとびとにたいしても説明を与えることができない。しかしましろ、かれらは「それらについて論じるときに」、適切にも感覚対象をもちいる。そのさい、かれらは感覚対象を探求しているわけではなく、感覚対象のために論じるのでもない。そうではなくて、対角線や四角形そのもののために論じる。<sup>〔36〕</sup>また、可知的対象のもう一方の切片は、問答法が関係している。というのも、問答法はもろもろの仮設（ヒュポテシス）を、文字どおり「下に（ヒュポ）置かれたもの（テシス）」<sup>〔37〕</sup>となし、他方で「それらの仮設を」根拠や足掛かりとなすのだから。それは仮設ではないもの、すなわち万物の始原へと到達するためであり、そして、こんどは逆に「その始原を」把持したうえで、終局へと下降するためだが、そのさい、およそ感覚対象をもちいるのではなく、形相を通して、形相そのものをもちいる。<sup>〔38〕</sup>また、魂に生起する状態を、まさに次の四つ（に切り分けられた線分）の部分に割り当てるのは適切である。すなわち、いちばん上の部分は「直知」、一番目の部分は「思考」、三番目の部分は「確信」、四番目の部分は「影像知覚」と呼ぶのは適切である<sup>〔40〕</sup>と。

(37,20) したがって、これらのことを通じてもまた、以下のことが明らかとなつたと思われる。つまり、一方、存在者には四つの種差があり、他方、判別にも四つの原理があり、またロゴスは中間をしめつづけ——すなわち可知的対象と感覚対象——の極に触れる。そしてロゴスは、みずから始原である知性と感覚にたいする終局の位置を占めながら、それら（知性と感覚）によつ

て完成される。ものによつて似たものが知られるということは、これもまたあらゆる認識能力にかんして共通の公理である。じつさい、これらのうちの一組によつてもう一組を、一方の片割れによつてもう一方の片割れを十全に理解することが可能であり、これらについて共通にかつ個別的に等しい分割をなし、一方からもう一方への——すなわち、より劣つたものからより優れた（上にある）ものへの——推移の序列をつくることができる。そして、アルキュタスはまた、知性への万物の上昇と統合がどのようになされなければならないかを規定した。

(38,15~) 以上のことのあとで、かれは線分を切り分ける。一方、この線分が一つのものであるのは、われわれが認識能力を一つのものとして捉えるためなのだ。他方、かれは、この線分を存在者の最初の種差に応じて、そして、これらの存在者にもどづいて二つに分けられる判別能力に応じて、二分するのである。かれは、これらの種差をロゴスと形相への分有のてんで、つまり、分有するものの分有されるものとの類似性によつて、等しいものとした。それはつまり、或る意味で両者にとつて同じ類比が成り立つからである。概して認識能力は、自己の全体にわたつて同種関係を呈するゆえに、かれはさらに、それぞれの切片を同じ比例で分ける。かれは、明瞭さと不明瞭さによつて、また規定性の過不足によつて、認識能力の種差を設ける。そしてかれは、「それらの対の」二番目のものが一番目のものといかなるてんで異なり劣るのか、それら相互に区別を示すのである。

(38,29~) まず、かれは感覚対象を「よりなじみのもの」として分け、そのうちで似像としてもろもろの感覚対象から現れる「存

立」をとり出し、本性を同じくするものとして、水と鏡の中の映像（模像）を切り出す。またかれは、これらのもの「水と鏡の中の映像」がその似像であるような、もう一方の真実の部分を「映像から」分離する。その真実の部分「を構成するの」は、たとえば植物や動物である。じつさい、映像の「影像知覚」は、感覺がそれらの反射面に注意を向けることによって、これらのもの「映像」より生じる<sup>(39)</sup>。そして、ちようどこれらのものもまた、二次的なしかたで存立するように、そのようにして感覺は、これらのものを間接的なしかたで認識する。感覺は感覺対象に直接的に降りていくときには、ちようど感覺対象もまた、直接的なしかたで存立し、それじしんのうちに質料内在的な存立をもつようだ。

これららのもの「映像」との類比から、もう一方の切片をも学び知ることができる。なぜなら、数学対象にかかわる類は、似像と類比的な関係にあり、そのような類についての認識は、映像の「影像知覚」とのなんらかの類似性をもつからなのである。じつさい、数学対象にかかわる類についての認識（つまり「思考」）は「直知」から活動を得て、可知的対象からその似像としての数学的対象へと移り行き、仮設を用いながらもその原因を理解しない。

（39, 19～）このこと「可知的対象の似像であること」が数学的対象の徴標である。しかし、それは可知的対象ではない別のものの予示的な認識であり、また別の、しかし「直知」ではない認識によつて思考されるものを把握する。というのは、この「直知」が問答するものの徴標であり、かれはこの「直知」を通じて、存在者と、形相と、仮設ではないものの一切を観取し、どんな感覺対象ももちいることなく、可知的実相を用いて、万物について説明す

るのだ。

（39, 26～）こうして、判別能力には四つがあり、それらにはなんらかの秩序が觀取される。そして、その活動はまさに以下のよう区分される。すなわち、いちばん上には「直知」が、二番目には「思考」が、三番目には「確信」が、四番目には「影像知覚」が「区分される」。

（40, 5～）こうして以上のことから、つまりこれらの区分から、数学対象の徴標が一体なんであるのかということが十分明らかとなつた。

## 第九章（40, 7～）

さて次に、数学の種がなんであつて、どのように存立しているのかを、限定的なしかたでも把握すべきであるならば、第一にそれを「数学」を魂に帰するひとびとの説を見てみよう。なぜなら、「このばあいも」ひとはこれ「数学の種」へと限定的なしかたで思考を向けることができるだろうから。

（40, 12～）さてこうして、以上のような理論上の洞察にしたがうならば、ひとは魂を数学対象の一つの類として理に適つたしかたで定めることはできないであろう。というのも、そうすれば、数学的実体についての認識は可分的なものとなつてしまふだろうからだ。まさにそれゆえに、魂について、「あらゆる方向に延長するイデア」<sup>(44)</sup>や、「自動の数」<sup>(45)</sup>や、「比例のうちに存立している調和」や、なんであれ「一つの」姿に基づいた、そのようなものと規定すべきではなく、すべてのもの「数学の種」を共通に織り合

わせることがふさわしい。なぜなら、魂は数的イデア<sup>[47]</sup>であり、かつ調和を包含する数にしたがつて存立しているものなのだから、なんであれ数学の下にあるかぎりのすべての通約性は、魂の下に共通に包括されるべきであり、またすべての類比は魂の下に定位されるべきなのだ。こうして以上のことのゆえに、魂は、幾何学や算術と同時に、和声学とも類比的に共存する。そのため魂は、確かに、類比的に諸々のロゴスとも同じものである。また魂は、存在者の諸々の原理となんらかの同族性をもち、存在者すべてに触れ、万物にたいして似たものとなることができる。

(41, 4-)さて、このように「魂を数学対象と類比的に」理解する根拠とは以上のようなものである。だが、いかにして限定され、規定されたすべてのものが、数から魂へと到達し、またいかにして一なる理がへ一なるものへから「魂へと到達したのか」、そして、いかにして大きさと「次元の一」増大へと進む過剰なる力が、みずからをすべての尺度を受けとるものに与えるべく、幾何学的実体から到来するのかを、もし、われわれが見つめるならば、そのことは数学と同時に魂についての考察の端緒となるであろう。調和的な運動の力と、ロゴスなきものの秩序と均衡、そして協和的な数のうちにあるか、あるいは、協和を包含する優れた均齊は、実体的な調和から生じるのである。(41, 15)それゆえまた、魂はそれじんも調和なのだから、調和を聞き取り、調和されたものを喜ぶのであり、魂の本性は数や他のそうした数学的尺度からなる。その尺度とは、可知的形相にたいする同族性、また可感的实体すなわち質料内在形相にたいする同族性を引き受けるものである。じつさい、現在の説はこのすべてにたいする考察の端緒をあたえ

る。というのも、上述のように仮定された数学にかんする説は、そうしたすべての概念を提供するのに十分なのだから。

(41, 24-)そして、その説全体を要約していうならば、われわれは魂が数学対象すべてに共通な原理のうちにあると考えるのだ。つまり、魂は数学対象を判別する力をもち、また非物体的な尺度そのものを産む力、作りだす力も有すると考える。そして、質料内在形相の産出や、似像をとおしての創出を、その尺度に適合させることができるのである。その創出は、「肉眼に」顕でないものの可視化へと進みゆき、外部のものを内的なものに結びつける。つまり、以上にもとづき総括的にいうならば、魂のロゴスはそれじんで数学の全体系を包摂するのである。

## 第一〇章 (42, 7-)

だが、魂は数学的存在すべての混合なのか、あるいは、先導する一つのロゴスにそくしてすべて「数学的存在」を存立させるのか、くわしく吟味する必要がある。そこで、もし魂が全体から構成ならば、それがあつまつて魂が混成される、「数学」体系を構成するものが魂に先行して存在し、もはや魂はそれじんで数学的存在の原理ではありえない。いや、魂は他の不条理にくわえて、ばらばらに存立しているがおなじものにあつまる諸数学から産みだされたものとなる。<sup>[48]</sup>「このことは」魂をふくんだ或る合成体を、すなわちあとから産まれた存立を——というのも、その存立はなにかより前のものから成り立つていてから——「魂として一もたらしてしまう」しかし、それは不条理だ。他方、もしこの魂が数学的存在を第一に創始するものであり、この数学的

存在を自分じしんから導きだすのであれば、魂はそれよりも年長だろうし、また原因として先導し、「数学的存在とは」異なるものとして勝っている。だが、これもまた現在の説に反する。といふのも、かくして魂は数学的存在よりも価値あるものになつてしまふからだ。したがつて、魂は数学的存在に先行せず、随伴するのでもなく、それらと軌を一にして進み、ともに存立しているとのべる方がよい。その魂は「数学的存在の」あますところなき全体からなる混成を、合成されていないもの、不可分なものとして有し、それらに一様に現前し、單一的にそれらに与るのであり、それら全体を包摶する力をみずからの中に囲いもち、その数学的 existence に、同一のしかたでみずからをあたえる。しかし、もしそのようであれば、魂はまさにすべてを完全に、なにひとつ欠けることなくみずからの中に包含し、なにもみずから之外にあることを許容せぬ（というのも、魂はそれじしん完全であり、存在するもののにも固有の原理を欠くことはありえないのだから）、全体にわたつて広がる同一の原理の本性は、そのようにひとつであろう。しかしながら、魂の異なる力や生命、活動に応じて、また魂のありかたの多性——それは一なるもののうちに包摶されてはいるのだが——に応じて、少なからず差異があることになる。これらをめぐる規定もそのようなものだと仮定するのは、理にかなつたことだといえる。

(43, 13~) したがつて、数学理論の本質について、これほどのことがわれわれによつて語られたのだとしよう。

## 第一一章 (43, 15~)

だが、この学知の働きは限定されたものではなく、知性の働きのように、同一の相にあるのでもなければおなじしかたなのでもなく、その認識活動は、そのようなことが知性にとつて本性的であるように、かならずしも自分じしんにもとづいているのでもない。そして、「数学的学知の働きは」外から知へと覚醒し、想起の発端を他のものから受け取ることで想起「内容」を自分じしんで前面に送り出す。また、それは知性の働きのように、單一の活動にそくして確固としているのではなく、むしろ動のうちにあり、自分じしんから発し自分じしんへとむかつて進むのだ。しかし、知性的なもののように、自分じしんで満たされているというのでもなく、探求や発見のうちにあつて、認識活動の或る空白から自分じしんを満たすことへとつねに前進する。いうなれば、限り無限からひとしく中間に定位されるのである。そのため、つねに無限から規定化にむかつて進み、数学形相を分有するように変ずる。そこで、これらすべてゆえにまた、最初の学習が先導し——その発端を提供するのは教師である——つぎに発見が随伴して——その発見はなんであれ教師により据えおかれた基本原理に依存しともなう——それからこの学知は生ずるのである。というのも、この基本原理に準じて、魂は数学における真なる形相を想起し、その形相に固有のロゴスを前面に送り出すからだ。しかしながら、ときに「この数学的学知の一活動は両方に共通するものとして生じ<sup>149</sup>、まさにそれゆえ、アルキュタスは『諸数学について』のなかで次のように述べるのだ。「じつさい、汝が無知であった

ことについての学知を有することになるのは、他のものから学んだか、自分じしんで発見したかのいずれかである。ゆえに、一方、学ばれたものは他のものから、そして異質なものとしてあり、他方、発見されたものは自分じしんによって、固有なものとしてある。だが、探求せずに発見するのは困窮を極め、めつたにないことをだが、探求者は行き詰まりなく容易に「発見する」。されど、知ることなしに探求するには不可能だ」と。じつに、かれはこの論のなかで最初の学習をそうした「数学的」学知の発端としてさだめ、その学知の特徴を他のものから受け渡されるものとして証示した。かれは「自分じしんで発見する」ことを第二のものとして付け足したのだ。というのも、たとえそれが可能的に先行するのとしても、これはわれわれとの関係であり、すくなくとも人間にとつての順序にそくしていえば「一番目なのだから。じつさい、生成界に落ちたものは、まずさきに他のものによって思い起こされる必要がある。したがつて、一方、学知を受け取るこの方法はふたつあるとも仮定できるが、他方、思惟によつてそれらをひとつものとしても包括できる。というのも、われわれが数学対象を他のものから、そして異質なものとして学び取るときにはいつも、われわれじしん、数学対象を自分じしんに由来する固有なものとして手にするからである。このことは、発見「の場面」から容易にみて取れる。つまり、自分じしんのうちに数学対象を保持するようにわれわれはそれらを発見し、発見されたそれらを認識するのだ。そして探求「の場面」に鑑みても、おなじことが明らかとなる。つまり、もし知ることなしに探求するのが不可能ならば、われわれがそれらを知つていたときがあつたのだが、現在がそ

のときではないのである（じつさい、いまはそれらを知らないのだから）。すると、われわれはそれらを以前に知つていたことになる。それゆえにまた、探求者にとつて数学対象は発見のために行き詰まりなく容易だが、探求しない者にとつては困窮を極め、めつたにないのである。なぜなら、それらは或るしかたで魂のうちに内在し、より以前の或るときには魂をめぐり、現実活動態の学的認識の状態にあつたからである。したがつて、数学対象をあつかう学とは、探求から発見への道、すなわち学ぶことから探求そして発見への道である。まさに以上のことから、それは「数学的」(*μαθηματική*)という名でも呼ばれるのだ。というのも、学知がそこから基本原理を受け取る第一のもの、そこから離れては学知が生じることが不可能なもの、つまり「学ぶこと」(*μαυθάνειν*)だが、そこから名が採られたからである。

(45, 22~) 「数学的」学知について、これらも上述のように、われわれによつて詳細に検討されたのだとしよう。

## 第一二章 (45, 24~)

ひとは多様な数学の能力を列挙することが可能ではあるが、しかし同にして統一的な原因への多からの総合能力と、一から多へのとして手にするからである。このことは、発見「の場面」から容易にみて取れる。つまり、自分じしんのうちに数学対象を保持するようにわれわれはそれらを発見し、発見されたそれらを認識するのだ。そして探求「の場面」に鑑みても、おなじことが明らかとなる。つまり、もし知ることなしに探求するのが不可能ならば、われわれがそれらを知つていたときがあつたのだが、現在がそ

扱うディアレクティケーにもこのような考察活動は存在するのではあるが、だがしかし、この数学という学問はディアレクティケーにたいして少なからぬ差異を有している。というのも、ディアレクティケーは端的な存在を考察し、まさにそれを総合し、また分析するのだが、数学は数学対象を吟味し、それを巡つてロゴスを用いてかかる二重の活動を遂行するのである。

(46,13-)多くのものに共通点を見出す様々な能力が数学には存在するが、それは種々多様な数学対象の中になんらか共通な種や共通の比を、さらにそれらによつて種々多様なものが規定される共通の尺度を見いだすのであり、それは例えへ等と不等<sup>153</sup>についての理論であり、へ共約性と非共約性<sup>154</sup>についての理論である。というのもそれらの能力はより多くのものに渡つて共通に成立しているものを認知するからである。それらとは反対に、個々の存在に固有なものを認知する能力もあるのであり、それは例えば数であるかぎりの数の、大きさとして成立しているかぎりの大さの、その他のものについても同じしかたで、それらの固有性を認知するのだ。そして以上の能力には、すべての場面で成立している類比を観る能力もあり、それは上方、第一のものどもから始まって、最終的なものへと中間を通過して到達していく、多様なものの中に、同じ比やそれぞれの比を、至る所で保持しつつ、全体に渡つてその比を顯わなものとする能力である。しかしこの能力は数学的存在の美と、尺度を、そして調和と共約性を、なんらかの比の中で見るものとすべきではない。と言うのも、それはこの能力に固有の本性に応じて、良き秩序と完全性と、数学的種に相応しいかぎりのすべての善を有しているからだ。

(47,6-)ところで、多くのひとびとに、これら数学の能力は不動であつて、不動なる知識対象を巡つて活動するものだと思われているが、それはまったくのところ正しいことではない。<sup>155</sup>何故なら、動の数を、秩序と均齊とのてんで、それじしんで、また相互にどのような関係にあるのかを、また宇宙の運行と共に存在している魂の非物体的な周期を<sup>156</sup>、それらが共約性をどのような数にもとづいて、またいかなるしかたで得ているのかを、またにゆえにそれらは調和しているのかを、さらにそれに類するものを考察する、数学の一支分が存在するからだ。そしてその数学に天文学と調和理論は包摂されるのだ。そこで数学の能力を運動の考察をおこなう能力へも拡張させるために、これらも数学の基に包摂される能力とすべきである。だがそれらの能力と、静的で不動な種や比を考察する能力は分かたれるべきだし、数学に本性的な能力が多く存する、それら能力の相互の位置づけも勘考されなければならない。それらの位置づけは、一方が先行し他方が後続するという場合ならば、論理考察能力が関わる認識対象の存在本性にもとづいて規定されなければならないが、しかし一方がへ最も年長で美の極み<sup>157</sup>を考察し、他方がより劣り不完全なものを考察するというならば、美という優先順位にもとづいても、規定されねばならないのだ。そしてそれらに於ける差異は、活動のしかたや認識の相違から、さらにそれらの能力が密接に関連し、それぞれの学が適用されている、多様な対象からも把握されるべきである。

(48,3-)さて数学能力がどれほどのしかたで考察を行ふかは、その学がそれぞれ異なるた認識対象を扱つてゐることから検討

されるべきだ。というのも、これらにもとづいて数学の能力は多様に表れ、多くのしかたで活動を行うことで、まさに存在しているからだ。

(48,7~) このように下絵のようなしかたで、以上のことが端緒としては整理されたとしよう。だが適切にも、これらについての完全な考察を俟つことが必要であろう。何故なら、そうすることでも、これらについての教授が最も完成したものとして伝達されるからである。

## 第一二章 (48,11~)

すべての学術理論とすべての学術知識は、規定されていて、決して他のしかたではありえない第一の要素から不变性を得ておき、その要素を通じての展開からこの上なく完璧に把握を行うのだから、そしてさらにそれぞれの学知はその領域に固有な類からそれに応じた定義や論証の方法を見出しているのだから、数学についても、数学対象のすべての体系<sup>(48,11)</sup>に最も共通する要素を、まず最初に取り出し、そして最も固有ですべての数学対象に最も共通して拡がっている類の狩猟を行うことが必要である。そしてそれらを眺めあげたあとで、要素と類とは異なりうるのか、また同一のものがいかにして類として見られ、またいかにして類として見られるか、しかたで類や要素が見られるのか、そして一体なにによつて数学における類や要素は、他の学知や存在における類や要素、つまり可知的対象や生成の内で動くもの「の類や要素」と異なるつているのか、ということを再び考察してみよう。

(48,28~) さてまず、数学の要素や類が規定されており、つねに

一定だということは、哲学に携わる最も優れたひとびとが同意することだが、数学の証明そのものも、つねに同様にまた変わらずに、その証言を強めているのである。さらにそれらを巡る考え方が数学という存在の第一原理とも協和するということも容易に了解される。というのも、それらにおいては「一と多く」限定と無限×同と異×が学の要素と類であり、さらにその学によって認識される事物にも、それらは要素と類として内属しているからである。ならば一方、それらが原因として、つまりすべての数学の存在本性および数学に関する理論を創り出すものであることを見るならば、いま述べられた原因とは原理であるとせよ。他方で、それらが内属性なものとして、つまりその存在本性を充足し、学知の定義を充たすものと考えられるならば、それらは要素として理解されるとせよ。こうしてすべての数学対象に共通するものとしてそれらを凝視するならば、そしてそれらが数学の部分にたいして「数学」という一方を維持する紐帯を提供しながらも、それにも関わらず、またそれじんも自体的に成立していることを凝視するならば、まさにそのとき、われわれはそれらを類として認めるであろう。

(49,19~) したがつて同じものが、まずなんらかのしかたでは数学理論の、また数学によつて存在として理解される事物の導出者であり、なんらかのしかたでは要素として理解され、さらに別のしかたでは類として「理解されるのだ」。しかしこれは理性のみによる考察にもとづいたから異なるという訳ではないし、またそれらが変転した、つまり様々な関係に応じて一方から他方へ移り変わったからという訳でもなく、同じものがじしんに

おいて様々で多くの發出を行つたところにゐるるのである。とりわけそれは原因の違いといつてなんらの差異をも有していないのだ。といふのも、非物体的ななにかが、それじしんで有るといふことと、他のものを充填するといふことは同じではないし、またなんらかを創り出すこと、どのようなしかたであらうと存在に寄与するこゝとは同じ地位を割り当てられてはいないからである。わざに他のものと地位を割り当てられているものが、自体的な存在本性を、〈他のものの〉地位の複合合成のために供するなどといふことは決して可能ではなく、むしろその存在本性は手許から離してしまつて、それによって〈有るこゝ〉を完成する存在本性とは異なつたものを、みずから充填のために織り込んでしまつてゐるのだ。それとまったく同じ定めで、〈有るこゝ〉を提供する原因は、それによつて完成されるものに内属するのではなく、存在本性の同じ定めによつて、それよりも年長であり、それはじしんの中に分離可能な存立原理を有しており、それを通して原因から遠離つてこゝのにたいしてむじしんのあんに異なる存立を与えるのだ。

(50,12~) オヤニのやうにくく無限と限定とを、原理と要素と類においてわれわれは理に適つて規定したとしよう。数学の原理や要素や類は、可知的対象の原理や要素や類とは確かに異なつてゐるが、それは完全性、清浄さ、端的や、わざに最大限に拡がつてゐる包括性、規定のされかたと美、あいゆる善といつて可知的なものの後塵を拝してゐるからである。しかし生成にあるものにたいしては、その地位、均齊さ、不動で静的な本性によつて、形相への清浄な与りによつて、非物体的で非素材的な本性によつ

て、一□におとめればより美しくは無いに優れてゐるのである。まさに以上のことから結論されるのは、それらが両者の中間のものであり、両者の交わりを可能とする媒介的な位置を得ており、両者にたいし橋渡しを等しく行つことを可能とするものだといふのである。<sup>(15)</sup>

(50,26~) 以上のこゝをこれらの特徴に関しても（把握したならば）、わざはそれにそくした問題について過つたのではないであら。

### 【註】

- (1) イアハニアコロス本来の名や出身地、生没年などの情報は、J. M. Dillon, *Iamblichus Chalcidiensis In Platoni's Dialogos Commentariorum Fragmenta*, Leiden, Brill, 1973, pp. 3-53、あた回づけ Dillon による 'Iamblichus of Chalcis', *Aufstieg und Niedergang der Römischen Welt* II. 36.2, Walter de Gruyter, 1987, pp. 862-909 にみる。

(2) ピタゴラス派集成の失われた作品についての詳細についてはオマーラ (D. J. O'Meara, *Pythagoras revived*, Oxford University Press, 1989) の第一章を参照。

(3) オマーラ (op. cit., pp. 217-229) も参照。

(4) 章立てねどり直付行数表に記載、底本である Festa 版は從つて、*Iamblichus De Communi Mathematica Scientia Liber*, edidit N. Festa, Teubner, Stuttgart, 1891 reprinted. 1975. 並に底本

- (7) したがって、*πρεσβυτάρη* は直訳すれば、「最年長」だが、ノイドは「先行的」とした。これは『ティトメオス』34C で身体に比して魂が「年長」だと表現するノイドによつて上位であることを示したものに由来するからである。*προπονουμένη* は「導出する」ことだ。
- (8) *οὐδὲ πρότερος* 「1定数」。アハム『エレメス』16D5-6 の関連するところ指摘が R のコメンテに出てこない。ただし、一定数という語はプロティノス『エネアース』VI-6, 18, 1 にも現われた表現である。
- (9) *ἐπιστήμη* は文脈によつて「学知」「學問」「学科」「認識」などある。
- (10) R は τί を *χρήσιμος* に掛けているが、*χρήσιμος* は、男女共通の形容詞単数である以上、中性単数の疑問代名詞にかけるにはせどもな。むしろ τί は「なにゆえに」であるべきである。
- (11) これは純粹数学の「幾何学」の派生する、天文学や和声学などの応用的な数学諸学科をさしてくる。
- (12) τῷ ὄντων καὶ νοητῶν の接続詞 *καὶ* は並列ではなく、「つまり」である。後述されるように、数学対象とそれが関わる諸数学は、存在と認識において可知的対象と完成対象の中間的な位置にあり、したがつて数学対象を導き、これらに先行するものを上位者として有する。*πρεσβυτάρη* は直訳すれば、「最年長」だが、ノイドは「先行的」とした。これは『ティトメオス』34C で身体に比して魂が「年長」だと表現するノイドによつて上位であることを示したものに由来するからである。
- (13) 底本 *οὐδὲ πρότερος* ハーリー (*Proclus A Commentary on the First Book of Euclid's Elements*, Translated with Introduction and Notes by G. R. Morrow, Princeton, 1970, revised 1992, pp. 344-345)、ホマー (op. cit., pp. 156-176) も指摘するが、本書と、クロス『エウクレイドス幾何学原論第一卷註解』(以下『原論註解』) 序論第一部とのあいだには、内容的に重複する箇所が存在する。これについては、両者が同一の資料にもどりいたことによるのか、それともプロクロスが本書を使用したかによるのか、諸家に議
- (6) οὐσία 「存在本性」。この語は文脈に応じて、「存在」「有」「本性」などと訳し分けられる。
- (7) 底本も指摘するが、アハム『エレメス』16D3 を参照。これについては R のコメンテの参考。

「論がある。」からの第一章最終部まではプロクロス『原論註解』3, 1-5, 10を参照。以下『原論註解』に記及する所には「フコーム・リヤン版(Procli Diadochi in Primum Euclidis Elementorum Librum Commentarii ex Recognitione G. Friedlein, Teubner, 1873)の頁付行数表示によると。

(19)

ἢ πεπερασμένη ἀληθεά 「完成された真理」については、「限定された真理」として別訳も可能である。じつさい、イアン・ブリコスは第三章前半(12, 25-13, 3)において、「限定」τὸ πεπερασμένον と「無限定」τὸ ἄπειρονを数学対象の原理とは異なる、知性界の原理としてみとめている。また、新プラトン主義全般において、知性界の形相は限定されたもの、限定を与えるものである。こうした術語・背景をかえりみるならば、「限定された真理」という訳も可能であろう。しかし、対原理である「無限定」がここでは触れられていなかったので、例えば「種子的口inox」を捉える必要がでない。じつではあるせず、この属格句を10.9 τῶν τε ἀμερίστων οὐσιῶνの言ひ換えと考へ、「中間的なもの」を補わないで読む。

(16) 数学諸学の果たす役割は、プラトン『国家』525B3-531Dを参照。これらの学術によつて、この世界から真实在の世界へと到る道は一本のものとして貫かれていくことには、じつじの一つの動詞 διαπορθμεῖν καὶ διαβιβάζειν に付せられた δια σύντα接頭辞に示されてゐる所に思われる。 διαπορθμεῖν については第一三章註一五九を参照。

(17) 底本 ἀσωμάτων に従わず、Vitelli に従ふ ἀσωμάτου と読む。

(18) すべての類とは、直前の ὥστα ποτέ ἐστιν ἐν τῷ ὄντως ὄντι καὶ τῷ νῷ γένη 「真なる存在、つまり知性の中にあるかぎりの諸類」であり、底本が主に依拠した写本(Codex Florentinus = Laurentianus 86, 3. Fと略記)に付せられたスクロニアによれば、プラトン『ソピスティス』に示される有、同、異、静、動といふ、いわゆるプラトンの五大類である。

(20)

この一文(11, 23-25)の ἀπὸ τοῦτων ἡ ἐν αὐτοῖς は問題である。三つの可能性が考えられる。(一)両代名詞とも可知的对象にかかるものと理解するばあいである。じつさい、前文の ἀπό が支配している内容は存在についての学、可知的対象の直知や完成された真理であり、同一文中の代名詞がおなじ対象を指すという文法上の支持がえられる。つぎに、(二)両方とも数学対象とする読みであり、このばあい、「数学対象における知の完全性や絶対性を、ひとは数学対象に依拠してえることができる」となるが、前文とのつながりが弱い。最後に(三) ἀπὸ τούτων には前文の ἀπό にかかる同じものを補い(存在についての学、可知的対象の直知や完成された真理)、他方、その知を完全にすることが問題とされる εἰδῶται には、前文において規定を与える側とされた数学対象を理解する読みが挙げられる。たしかに、同一文中の二

つの代名詞がそれぞれ別のものを指すことには文法のうえで問題がある。しかし、数学対象の知の完全性が、知的なものの学や直知によつてえられるという内容は、前文の理由節(*yáp*)としての役割をはたすため、この読みを採用した。

(21) 紀元前一世紀から紀元後一世紀頃の、「アルキュタス」のものとして伝わる、新ピュタゴラス派の文献が存在する。かならずしも同一人物によつてこの文献が書かれたのでは

ないが、強い影響力をもつ人物が存在していたことはたしかである。紀元前五一四世紀に生きたピュタゴラス派アルキュタスと区別するために、通常「偽アルキュタス」と呼ばれる。イアンブリコスは以下の第八章において(35, 27-37, 19)、偽アルキュタスの『知性と感覚について』Περὶ νοῦ καὶ αἰσθήσεως を引用する(回書について H. Thesleff ed.), *The Pythagorean Texts of the Hellenistic Period*, Åbo Akademie, 1965, 附註 1111 を参照)。かかる箇所で偽アルキュタスは、プラトン『国家』509D の「線分の比喩」を引き合ひにだして魂にそなわる認識のありかたを四つに区分し(知性・学知・思ひなし・感覚)、魂の思考 διάνοια が感覚から思いなしや学知を経て知性にいたると論じる。イアンブリコスが「認識にかんする線の分割」ἢ τῆς γνωριστικῆς γραμμῆς τομῆς のぐるやこに念頭におくのはやいとした区分であら、いじじは魂の四つの認識能力に対応する数学対象を認めていよいよになるだらう。

(22) μεγέθους ところ属格を次行の「原因」*aitiai* にかけた。すぐあとで、数学の原理が「分割、多く、大きや、合成の原因をそれ(原理)じしんから与える」(13, 22-23) と述べられることに鑑みるならば、多さや大きさを原因にかける読みの方がよ

り整合的と判断した。  
この一方の節を対象の永続性・不動性の記述、もう一方を観る主体の永続的なありかたの規定と考えるのも可能である。

(23) 底本の *kata* (14, 6) ではなく、Vitelli が推測する *kai* を採用する。

(24) προπογέται につきて R によれば (p. 621, n. 31)、算術原理は他の個別数学原理を条件づけるが、条件つけられはしないふじふ本性ゆゑに、後者の原理に先行する。

(25) 以下第四章中心部は、スペウシッポス(むじくば影響を受けた同時代人)に由来するところ説がマーランによつて提案された (P. Merlan, *From Platonism to Neoplatonism*, The Hague, Martinus Nijhoff, 1968, pp. 96-140)。これにたしてペガウシッポスの断片集を編集したタッハは強く反対したが (L. Tarán, *Speusippus of Athens*, Leiden, 1983, pp. 86-111)、「トヤロハは肯定」(J. M. Dillon, 'Speusippus in Iamblichus', *Phronesis* XXIX, 1984, pp. 325-32 = repr. in; J. M. Dillon, *The Golden Chain*, Aldershot, 1990)、この箇所を思想的立場を示す資料として活用している ('Speusippus and the Ontological Interpretation of the Parmenides', *Plato's Parmenides, Proceedings of the Fourth Symposium*

*Platonicum Prague*, edited by A. Havlíček and F. Krařík, Prague, 2005, pp. 296-311)。せんだいの箇所については、熊田

陽一郎、『アリストテレスの水脈』(世界書院、一九九六、一八一〇〇頁を参照)。

(27) τὸ ἐν ὅπερ δὴ οὐδὲ ὅν πα δεῖ καλεῖν...「奴の<1>をまだ<存在>させんやせんなひな」せ μηδὲ ὅν τι εἶναι τὸ ἐν αὐτῷ「<1>じしんばらまだなんいかの存在ではなし」(アリストテレス『形而上学』1092a14-15 = スペウシッポス『断片四二』)を参照。しかしタラは、いにしへて、『断片四三』との類似性は認めつつも、新ピュタゴラス主義者や新プラトン主義者などによると推測する。

(28) εὐπλασεῖ ὥῃ 当該箇所のスコリアには「筆者『イアンブリコス』はいにじ以前に新ピュタゴラス主義者がおこなつたよううに、知的質料を導いていた。しかしほクロスはかれいに反対していた」とある。本書はおおぐの箇所で『原論註解』と並行しているにもかかわらず、本章には相応箇所がない。これについてオマーラは(*op. cit.*, p. 160, n. 13)、いのスコリアにその回答を求めている。いにじタラによれば(*op. cit.*, pp. 106-107)、現存断片によるかぎりでスペウシッポスは、質料いふう語をこの意味で使っておらず、いのいとからも本章がかれに由来しないと論じている。

(29) 第一章では数学対象は、可知的対象と感性対象の中間という位置を与えられていた。だがいのでは、「第一の類」という数が構成されるにされ、そのかぎりで存在論的な差異が生じている。いの種の齟齬は、本書が多くの書からの抜粋かい、

もじくはそれのをもとめた資料集に依存している可能性を推測せざる。同時に、その齟齬を修正しないイアンブリコスの姿が見えてくる。

(30) いの「文は三とおりの解釈が可能である。(一) 前文(16, 12-13)の φίας と一致させて、φύσεως を主語にした絶対

属格の構文である(いのばあら、έχοντων καὶ ἔχουσις の書を換えが必要とされる)。(二) R にしたがって、τῶν στοιχείων 属格を ἀπόστασιν にかけ、「諸々の要素とのより大きな距離」と読む(έχόντων の主語に困る)。(三) τῶν στοιχείων を主語にした絶対属格の構文である。テキストを何も変えずに読むために、今回は(三)の読みを採用した

(31) いの「図形」を、17, 27 で言及される立体図形と推定する。

(32) Vitelli の推測にしたがつて、διήκον αυτοῦ 読む。また、τὰντα τὰ παραθέγματα のままで意味をなさないので、πάντα τὰ μαθῆματα αυτοῦ を提案する。

(33) οὐ λόγος もじくば「いのでなされていの議論」か。

(34) οὐ προηγουμένως いの副詞については多くの議論がある。マーハは「付帯的なしかたではなく」(*op. cit.*, pp. 122-128) いの、タラは「直接的な結果としてではなく」(*op. cit.*, pp. 102-104) いの。これにたいして R は(*op. cit.*, pp. 622-623, n. 55)、「否定辞なしでこの副詞を考えるならば、「先行的に」という普通の意味ではなく、むしろ形而上學的に格段の意味を担わされており、いに現れたその否

定形は、文脈からして、「本質的にではなく」もしくは「第一位ではないしかたで」を意味している。そのうえで、「οὐ προηγουμένως は、先行する ἐπ' ἐσχάτῳ とは統語的かつ論理的にも関係があるものの、続く ἐκ δε と対応させる必要はない。というのも、そのような対応関係があつたなら、προηγουμένως の前に μὲν、もしくは προηγουμένως の後に ἀλλά があつてしかるべきだからだ」とする。それらをふまえ、R は「この最終段階で、最初にではなく、つまり末端要素の第四と第五の結合において悪は生じるが、これは、なんらかのものが、本性にそくして生きておらず、本性にもふじていたありかたをもはや支配しなくなる」に由来して生じる」という訳をしている。これにたいしわれわれは、まず οὐ προηγουμένως は先行する ἐπ' ἐσχάτῳ 以降の γενέσθαι までを受けてくると考え、やむにこその一文は全体として ἐκ δε 以降の文と対応関係にあるものと考え、訳を行つた。

(35) 「音階」と訳出したのは áρμονία である。この語は文脈によつて「調和」ともした。

(36) 底本も指摘する所など、プロクロス『原論註解』(7, 22)にしたがい τὰ を補へ。

(37) 底本の θεωρήται ではなべ、θεωρεῖ 能動相で読む。

(38) アパラタスにしたがい、τὸν ποσὸν のあとに καὶ τὸ を、ποσὸν のあとに πρὸς ἄλλο, ἢ を補へ、全体として τὸ τοιόνδε ἔιδος τὸν ποσὸν, καὶ τὸ πόσον πρὸς ἄλλο, ἢ τὴν τάξιν αὐτὸν。R やよひ S はこれを採用しない。U はこの指摘に理解をしめしながらも、19, 10 の ποσὸν を除き、ἄλλο を挿入する。

いう最小限の変更にとどめていい。

(39) Vitelli にしたがつて αὐτὸν を ἀῦ τὸ にして読む。

(40) ὑποθέσεις πρώτας 「最初の仮設」。のちの第八章 (37, 11) での偽アルキコタス引用の際にあつたためにこの語の意味が説明される。

(41) 底本の読みにはしたがわず、ταῦτὸν καὶ τὸ の間にカンマを入れて読む。

(42) 偽プラトン『ヒュノヘリス』991E3-992B3 参照。この一文は内容上、多少の変更をともないながら、プラトンの言葉として第七章 (31, 10-11) に再び現れる。

(43) 偽プラトン『ヒュノヘリス』991D5-992B2 参照。

(44) U によればゼウタゴトスを指すところが、そうちある。

(45) プラトン『国家』536B1-6 参照。

(46) プラトン『国家』527D6-E2 参照。

(47) プラトン『国家』527E2-6 参照。

(48) 両面がそれぞれ白と黒になつてゐる陶片。「陶片遊び」οστρακίδα と呼ばれる遊びに用いられた。

(49) プラトン『国家』521C5-D4 参照。これまで μάθημα (μαθήματα) はおもに「数学対象」を意味してたが、以下、

プラトン『国家』の市町箇所では、学ぶしての「数学」を意味するところがあり、そのかいにはそういう訳出ある。

(50) 23, 1-27, 24 にプラトン『国家』523A10-531C6 の引用に依拠してくる。

(51) プラトン『国家』523A10-523B3 参照。ただしプラトンの本

文の *εἰση* をヘアンブリコスは *εἰσόμεθα* に替えている。

(53) プラトン『国家』523C3-5°。

(54) プラトン『国家』523C7-8°。

(55) 底本では *ὅμοις αὐτῷ*「視覚それじた」とだが、プラトン『国家』

523D5 では *ἢ ὁμοίς αὐτῷ*「視覚が魂に向かつて」となつてい

る。このでは底本にしたがつた。

(56) プラトン『国家』523C10-D6 参照。視覚は、指を指と示し

つて、同時にそれを区別のものとして示すことはない」とい

ふるム。

(57) プラートン『国家』523D8-9 参照。

(58) プラートン『国家』523E4 の *ἢ μαλακότητα* が写本では除か

れているが、以降の例からすれば補填されねばきであらう。

(59) プラートン『国家』523E1-524A2°。

(60) プラートン『国家』524A5-9°。

(61) プラートン『国家』524B1-2°。

(62) プラートン『国家』524B3-5°。

(63) プラートン『国家』524B7-8°。

(64) プラートン『国家』524B10-C1°。

(65) プラートン『国家』524C3-4°。

(66) 底本では *ἢ κείνη* だが、プラートン『国家』524C8 の *ἢ κείνη* を採つた。

(67) プラートン『国家』524C6-8°。

(68) プラートン『国家』524C10-11°。

(69) プラートン『国家』524C13°。

(70) プラートン『国家』524D1-4°。

(71) プラートン『国家』524D4°。ヘアンブリコスは疑問で終わる

この一文を次の文へ続かせる。*kαὶ τὰ ὄλλα μαθήματα* 「お

たやおおまな数学対象は」(25, 14) はヘアンブリコスによる

挿入であり、この *μαθήματα* は数学対象をおおいかに意味し

ている。

(72) プラートン『国家』524D6°。イタンブリコスは原文 *ἀναλογίζου* を文脈に合わせ *ἢ ἀναλογίζεσθαι* *ράδιον* としている。

(73) プラートン『国家』524D6-525A3°。ヤキの引用と同様に、*ἢ* *ἄλλο πτυῶν μαθημάτων* 「*ἢ* ほかなんいかの数学対象」(25,

17) もこの記が付記せられている。

17) もこの記が付記せられている。

17) もこの記が付記せられている。

(74) プラートン『国家』525A4-6°。

(75) プラートン『国家』525A7-8°。

(76) プラートン『国家』525A10-11°。

(77) プラートン『国家』525A13°。

(78) プラートン『国家』525A14 *ὑπερφύῶς* 「並外れて」は、『国家』

では「*κακά*」の対極である。

(79) プラートン『国家』525B1°。

(80) プラートン『国家』525B2°。

(81) プラートン『国家』525C2-3 参照。

(82) プラートン『国家』525C5-6 参照。

(83) プラートン『国家』525D1-2 参照。

(84) プラートン『国家』525D5-8 参照。

(85) プラートン『国家』526A6-7°。

(86) プラートン『国家』526A8-B3 参照。

(87) プラートン『国家』526B4°。

- (88) プラートン『國家』526E1-5°。  
 (89) プラートン『國家』526E7-8°。  
 (90) プラートン『國家』527A10 参照。  
 (91) プラートン『國家』527B4-5 参照。  
 (92) プラートン『國家』527B8-10°。  
 (93) プラートン『國家』527E2-3°。  
 (94) プラートン『國家』528C3-4 参照。  
 (95) プラートン『國家』528D1°。  
 (96) プラートン『國家』529B4°。  
 (97) プラートン『國家』529B4-5 参照。プラートン『國家』では、*ν*は直前の引用箇所とわざりながらであつたが、イアンブリコスはこれを一つに分け、別の引用箇所とつなげてゐる。その結果、「学問」を表していた *μαθήματα* が、論理などによつて把握されるべき「数学対象」の意味をもたれていく。この点で、U&RおよびS-Kにしたがわない。  
 (98) プラートン『國家』529D4-5°。  
 (99) プラートン『國家』529D7-8°。  
 (100) プラートン『國家』529E4-530A2 参照。  
 (101) プラートン『國家』530B1-4°。  
 (102) プラートン『國家』530E3 参照。  
 (103) プラートン『國家』530E5-6 参照。  
 (104) プラートン『國家』531C6-7 参照。  
 (105) プラートン『國家』531C9-D3 参照。  
 (106) 底本の *ἀοράτῳ* 「田に見えない」を、プラートンにならつて *φάτῳ* 「田に見えない」に変更して読む。  
 (107) プラートン『國家』532B6-C7 参照。  
 (108) *ν* *επίστημα*、第七章 32, 7 もやば イア・ハーランベ『算術入門』ターマス派集成第四論攷』である『アリストテレスの算術入門』と同内容である (Iamblichus, *In Nicomachi Arithmeticam Introductionem Liber*, edidit, H, Pistelli, Teubner, Stuttgart, 1894, reprinted, 1974, pp. 7, 2-9, 23)。  
 (109) ティールズにアルヌロウスの真正『墨』47-B3 である (H. Diels, W. Kranz, *Fragmente der Vorsokratiker*, 1er Band, Weidmannsche Verlagsbuchhandlung, 1951, pp. 398-419. 〔*DK* と略記〕)。*ν*の断片はつづけば註 150 およびベシトマヘによる研究も参照 (C. Huffman, *Philolaus of Croton*, Cambridge University Press, 1993, pp. 113-123)。  
 (110) ピートロは数についての観點からの検討が行われる。ただし *ν*の数は量として示されているため、中性単数となる。  
 (1) 数そのものの考察。偶数、奇数といった例からわかる  
 もの、これは数の性質という観点である。  
 (11) 数の関係についての考察。例からわかるように、  
 或いは数は他の数に対し、等しいか、等しくないかのい  
 ずれかである。*ν*の関係を任意の自然数 a,b で表せば、  
 $a = b$  か (等)、 $a > b$  もしくは  $a < b$  (二つとも不等)  
 の三通りしかない。
- (111) *τέλειον* (sc. ποσόν 意味として *ἀριθμός*) 「完全数」とは、  
 その数を構成する約数の総和が自身と等しくなる数のことを。  
 τῶν μαθημάτων 「数学」に変更してある。  
 れまで詳しく述べておいたのがい」を、ヤアハーランベは、

例えば六は「一」、「一」という約数から構成されるが、その総和は六である。この完全数については、エウクレイテス『幾何学原論』第七巻定義一二を参照。

(112)

*έλληπτες* (sc. πόσον = ἀριθμός) 「不足数(むこくは不完全数)」とは、その数を構成する約数の総和が自身よりも小さくなる数のこと。例えば八を構成する約数は四「一」であるが、その総和は七となり、八よりも小さい。

(113)

*χαίρω*なる定義はイアンブリコス『ハコマコスの算術入門』

(114)

にて行なわれている。  
「い」では、さきにあげられた「他の数に対してなんらかの状態にある数」のうち、不等となつていい関係を取りあげる。したがつて以下の二つの例は任意の一一つの自然数が不等な関係にある事例である。

(115) πολυπλάσιον (sc. πόσον = ἀριθμός) 「倍(数)」は a = nb (ただし n は n > 1 の自然数)。

(116)

*έπιμόριον* (sc. πόσον = ἀριθμός) 「部分超過比」は、

字義通りに訳せば「部分超過比」。a > b で、n が n > 1 の

自然数のばあいは、 $a = (1 + 1/n)b$  が示される関係を表す(便宜上、分数で表記した)。この数比はボエティウス『音楽教程論』でワテン語 superparticularis (sc. proportio) と

訳された。

(117)

*έπιμερές* (sc. πόσον = ἀριθμός) 「ヒュメレス数比」は、 $a > b$  で  $m < n$  のばあいは、 $a = (1 + m/n)b$  が示される関係を意味する。これもボエティウス『音楽教程論』でワテン語 superpartiens と訳された。

(118) この箇所は偽アルキュタス『諸数学について』からの断片である (F. G. A. Mullachius, *Fragmenta Philosophorum Graecorum*, Liber 1, 1883, p. 564)。第一章の註 11 参照。

R による校記にしたがって *καταλήγουσα* を *καταλήγοντα* に読みかえる。

(119) 偽プラトン『ヒュノハラス』991E3-992B3 参照。以下の二文は第六章(21, 4-5) すでに現れていた。

(120) (121) 以降の箇所 (32, 13-35, 26) にかんしては、(プロティノスからの引用も含む) ハボニアス『靈魂論』註解 (Hayduck 129, 8-130, 29) 参照。

なお、以降で語られる諸対象について整理しておこう。

(一) 可知的対象 *ἰδητά* のなかに、(一ー一) 固有の意味での可知的対象(学の対象、*ἐπιστητά*) と、(一ー二) 思考の対象 *διανοητά* が含まれ、また、(一ー一) 感覚対象 *aiσθητά* のなかに、(一ー一) 固有の意味での感覚対象(思ひなしの対象 *δοξαστά*) と、(一ー二) 似像的対象 *εἰκαστά* が含まれるといつ構図である。

(122) *τῶν μὴ ἀποδεικτικῶν* 次行の *παραδιηθανομένων* を同格と解した。なお、ソポニアスの註解では *τὴν μὴ ἐπὶ τῶν ἀποδεικτικῶν* がなつている。

(123) *τῶν προφερόντων* と云う属格を、「わぬ出す人」の「確信」と解するか、あるいは「わぬ出すひふるみ」「ぐの」確信」と解するかという問題があるが、いじでは前者を採用した。

(124) *γνωμένης* を絶対属格と解したが、U および R のように、*τῆς θετικής* を比較と解して *μᾶλλον* にかけねど、「真実在ぐの(直

接の} 接近が生じる} ふつよつむ、むしろ理性によつて」とな。

(125) 「降下したイデア」という表現は、次行の「可知的映像」(33, 25) よると、奇妙な印象を与える。それゆえ、Uのよつに *κατιόπτων* ドクトを *ἀπὸ τῶν ιδεῶν* にかけず、主語を補つて絶対属格と取ることも可能である。そのばあいの訳は「[思考の対象が] いわばイデアから降下して {...}」となる。

(126) 内容的に *τὰ δὲ* (34, 3) は「似像的対象、すなわち影のなかに〔現れる〕もの」だつ。問題は *ἐκεῖνα* (34, 2) で、U より *R*になつて「感覚対象」としたが、語順的な違和感が残る。あるいは「イデア」を取ることも可能かもしけないが、内容的に合致しない。

(127) プロティノスにかんしては、イアンブリコス『ピュタゴラフス的生について』一七章一三二節および二六章一四七節を参照 (Iamblichus, *De Vita Pythagorica*, edidit L. Deubner, Teubner, Stuttgart, 1975)。ただし、同書の編者ドイプナー (1966) (op.cit., p. 75)、プロティノスとしても伝えられてゐるところ。

アパラタスにしたがつて、*τὸν* を削除して読む。

(128) 「学の対象」*ἐπιστατά* あわが、このプロティノスの引用では思考の対象についての言明であるため、イアンブリコスの「固有の意味での可知的対象」ふつよつ意味合いは含まれていないだろう。

(130) 以降の箇所で、イアンブリコスは、プロティノスの引用を八つの観点から要約している。簡便のために整理番号を付す。

παρ' ἐκεῖνων たゞは「形相から」と解している。ここでは「第一のものから」とするRになつ。

(131) アルキュタスにかんしては、偽アルキュタス『知性と感覚について』断片 38, 19ff を、および第一章の註一一を参照。偽アルキュタスの断片は、*ποιητά* の代わりに *ποιεῖ ἀ* を讀んでいる。

(132) 以降の箇所にかんしては、プラトン『国家』509D 以下のく線分の比喩》参照。

(133) (134) (135) 「等しく」 *ἴσα* にかんして、前註の『国家』509D6 の論述からすれば、Uのよつに「等しくなく」 *ἄνισα* を読むべきだろうが、Rになつて、ひよおぎ原文よりの訳出を試みる。プラトン『国家』510B4-511A2 参照。

(136) 底本の校訂に従じ、37, 11 の *ἀλλ'* を削除して読む。

(137) Rにしたがつて、*οὐχ* を付加して読むばあい、同文の訳は「問答法はもろもろの仮設(ヒュポテシス)を、文字どおりに〈下

に(ヒュポ)置かれたもの(テシス)〉のままにするのではなく

く、むしろ根拠や足掛かりとなすのだから」とな。

プラトン『国家』511B2-C2 参照。

プラトン『国家』511D6-E2 参照。

(138) 底本の校訂にしたがつて、39, 7 の *κατὰ δεύτερου τρόπου* を削除して読む。

(139) (140) (141) (142) *ἀφισμένως* 「限定的なしかたで」。Rは in maniera determinata と、Uは precisely と、S-Kは definitiorisch としている。以下の内容からわかる、数学の種々の存立を、端的に、むしろはそれ自体じつはなく、魂との関連という限定した視点から

「語じる」ひた意味して、いかふわれたと思われる。

(43) Ην (40, 12) より第九章終ア直前までは (43, 11)、ヘボニアスが引用を行つてゐる。

(44) (43) アンブリコスは名前を出してゐないが、ストバイオス *Ioannis Stobaei Anthologii Libri Duo Prioris qui inscribi solent Eclogae Physicae et Ethiccae*, ed. Curtius Wachsmuth, 1884. 以下Wと略記し、ペーパ番号を添へる) によつて一部が伝わる。アンブリコス『魂につきて』では、これらの定義とそれを主張した三人の名前があげられてゐる。それによれば *iδέαν τοῦ πάντη διαστατοῦ* 「あらゆる方向に延長するイデア」はスペウシッポスの定義である (W. 364)。ただし、タランは (op. cit., pp. 365-374) アリストテレスに残された既知の内容との定義が整合しないとして、アンブリコスの同定に賛成しない。アンブリコス『魂につきて』は、近年テキスト校訳および訳をこもなつた研究書が出ており、そちらも参考されたい。J. F. Finamore, et J. M. Dillon, *Iamblichus De Anima: Text, Translation, and Commentary*, Brill, Leiden, 2002.

(45) (45) *ἀριθμὸν αὐτοκίνητον* 「自動の数」はクセノクハトスの定義である (W. 364)。

(46) (46) *ἀριθμίαν ἐν λόγοις ιδεστῶσαν* 「比例の成立してゐる調和」は、「比例を包含するもの」(W. 364)としたモデラトスによる魂の定義であつた。この学説紹介は、それぞれ魂を幾何学との関連でのみ (スペウシッポス)、算術との関連でのみ (クセノクハトス)、和声理論との関連でのみ (モデラトス) 論じる人物たちへの批判となつており、それらのどれか一つ

に限定せずに定義すべきではないとするアンブリコスの立場が鮮明となつてゐる。

(47) (47) 底本どおりであれば、*τῆς ψυχῆς καὶ ιδέας οὐσῆς ἀριθμίου* 「魂は数的なイデア」であるが、ヘボニアスは「*アス*」を引用するにやこして *ἀριθμίου* から形容詞を *ἀριθμοῦ* に名詞に変えている。この形容語さうの書ではこれが唯一である。

(48) (48) 底本の *ἀπογεννωμένης* (42, 14) ではなく、Hemsterhusius の *ἀπόγεννωμένη* を採用する。また、次行の *ἀπότοις* のあとに句点を付し、*καὶ* 以降、主語が異なる別の文が並ぶと理解した。

(49) (49) この「両方に共通するもの」*κοινὴς ἀριθμέρων* (44, 10) は具体的になにを指すのか。R は *ἀριθμέρων* を「限と無限」と解して、*κοινὴ* を「活動」*ἢ ἐνέργεια* に修飾せめてゐる。このれば、*ἀριθμέρων* を直前の「〔教師によって与えられた〕基本原理に準じて、数学における形相を想起するもの」とその形相に固有の口型を前面に送り出すこと」つまり他のものに教わるじふくそれを自分がすでに知つて有していたものとして想起する」と理解する。これらの活動は、想起がもつ二側面である。以下での述べるよいに (44, 24-45, 1)、数学的学知を受け取る方法は、*εἰδήσιτον* ともいふべきともいふべきである。類似した論述を展開するプロクロス『原論註解』の註葉を引き合いで出すなどば、「表れによつて覚醒する」*ἀνεγεννημένη μὲν ἀπὸ τοῦ φαινομένου* 想起と (45, 10-11)、「自分でしんに振り回した思考のものから内的に〔想起内容を〕送り出す」*προβαλλομένη δὲ ἔνδοθεν ἀπ’ αὐτῆς τῆς διανοίας εἰς ἐστή*

éπιστρεφομένης) 横起(45, 11-12)の両方のいじりがおへい。

(150) 44, 14 にかんして、E は ἀλότρια とすが、Arckerius は Villoison やよひ Hemsterhusius は ἀλότρια とし、スレバ

イオバ (Anthologiū Libri Duo Postiores, ed. Otto Hense, 1894. IV 1, 139) は ἀλότριον とし、N ではストーバイオスの読み方を採用する。DK, 47-B3 では、N の箇所からアルキコタスの断片を採録するが、ἀλότρια と校記し、それに合わせて「私の行の ἵδιον が iδία である」。DK は脚註で、

イアンブリコス『普遍数学論』(ねむらく底本版)の読みは ἀλότρια だる報告しているが、これは誤りであへい。

(151) マーハンによれば (op. cit., p. 12), N の最後の一節は、「E のように探求すべきか知りない者にひつて、発見するにむは不可能である」と通常訳されるのだるが、(ねむらく) μὴ ἐπιστάμενον δὲ {του} ἔπειται ἀδύνατον {ἔξεουρεν} とよむ)。

通常の訳としてなにを念頭にねむらくのか定かでないが、N のアルキコタスの一節が、イアンブリコスによつて想起論としてひとひべなおされたとかれは指摘する。

(152) δυνάμεις 「能力」。N の章は前章で ἔργου を論じてゐるが、これに応じて、なお前章とともに N の章はプロクロス『原論註解』(19, 6-20) と並行してゐる。ただし、とりわけ N の章の性格について、マーハン (op. cit., pp. 11-33) を参照。

(153) αἱ τοῦ συμμέτρου καὶ ἀσυμμέτρου (sc. θεωρία) 「共約性と非共約性についての理論」。共約性 (もしくは均整) は頻出するが、非共約性はいゝが初めてであり、唯一である。

(154) 以下では不動ではない対象を扱う数学として、天文学と和

声理論が挙げられている。だが第九章 (40, 23-41, 3) では

「幾何学と数論、和声理論に魂が存する」) として、天文学が脱落した、こことは異なつた区分が行われてゐる。

(155) N は τὸν τῆς κυκλήσεως ἀριθμὸν 「動の数」という言い方がアリストテレスによる時間の定義であると指摘している。これについては、アリストテレス『自然学』219b1-2、および『天

体論』279a14-15 を参照。

(156) τὰς τε ἀσωμάτους τῆς ψυχῆς περιόδους 「魂の非物体的な周期」もしくは「周天軌道」。魂の浄化が行われる「場」を巡るプラトン派の意見がイアンブリコス『魂について』に認められる (W. 457, 27)。それによると、N の περίοδος を、或るひとびと περικόσμος、つまり宇宙の具体的な「場所」として考へ、プロティノス始め或るひとびとはそれよりも存在論的に上方だとして考へたといへ。

(157) 底本 47, 20 の θεωρητικάς, καὶ のカンマを取り、47, 21 の δυναμένων を δυναμένας としたうえで、θεωρητικάς を δυναμένας にかけて読む。

(158) 底本では σύντασιν にあるが、アパラタスにしたがつて σύντασιν と読む。

(159) διαπορθμένειν ἐπ' ὅπῃς 「等しい橋渡しを行つ」第一章 (10, 19) では下方から上方へと「越境させる力」であつたが、こゝ τοῦ συμμέτρου καὶ ἀσυμμέτρου (sc. θεωρία) 「共約性と非共約性についての理論」。共約性 (もしくは均整) は頻出するが、非共約性はいゝが初めてであり、唯一である。

う訳した。